

# 多古町一鍬田甚兵衛山遺跡

—刈り草置場埋蔵文化財調査報告書—

平成9年3月

新東京国際空港公団

財団法人 千葉県文化財センター

た こ ひと くわ だ じん べえ え やま  
多 古 町 一 鍬 田 甚 兵 衛 山 遺 跡

—刈り草置場埋蔵文化財調査報告書—



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第305集として、新東京国際空港公団の刈り草置場予定地事業に伴って実施した香取郡多古町一鉢田甚兵衛山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡では、旧石器時代の荒屋型彫器や縄文時代早期の住居跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

## 凡　例

- 1 本書は、新東京国際空港公団による刈り草置場整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡多古町一鉢田字甚兵衛山454-1ほかに所在する一鉢田甚兵衛山遺跡（遺跡コード 347-011）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、新東京国際空港公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任技師 矢本節朗が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、新東京国際空港公団、多古町教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「五辻」(NI-54-19-10-1)、「多古」(NI-54-19-10-2)  
第3図 千葉県発行 1/2,500成田都市計画図「IX-KF 72-4」、「IX-KF 73-3」、  
「IX-KF 82-2」、「IX-KF 83-1」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
(1)	調査の経緯と経過	1
(2)	調査の方法	1
2	遺跡の位置と環境	2
(1)	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
(2)	層序区分	5
II	旧石器時代	9
1	文化層の概要	9
2	ブロック各説	9
(1)	第1ブロック～第3ブロック	9
(2)	第4ブロック	16
III	縄文時代	23
1	概要	23
2	遺構と遺物	23
(1)	堅穴住居跡	23
(2)	陥穴	23
(3)	土坑	26
3	グリッド出土遺物	29
(1)	土器	29
(2)	石器	33
IV	中世以降	34
1	概要	34
2	遺構	34
(1)	溝	34
(2)	井戸跡	34
V	まとめ	35
報告書抄録		巻末

## 挿図目次

第1図 グリッド配置図	2
第2図 確認グリッド・トレンチ配置図	3
第3図 遺跡周辺の地形	4
第4図 遺跡の位置・周辺遺跡	6
第5図 基本層序	7
第6図 旧石器時代ブロック分布	8
第7図 第1ブロック器種別分布	10
第8図 第2ブロック器種別分布	11
第9図 第3ブロック器種別分布	13
第10図 第1・2・3ブロック出土石器1	14
第11図 第1・2・3ブロック出土石器2	15
第12図 第4ブロック器種別分布	16
第13図 第4ブロック出土石器1	17
第14図 第4ブロック出土石器2	17
第15図 第4ブロック出土石器3	18
第16図 繩文時代以降遺構分布	22
第17図 S I 006	24
第18図 S I 006出土土器	24
第19図 S K 001・002・008、S K 008土器	25
第20図 S K 003・007	26
第21図 S K 003出土土器	27
第22図 S K 007出土土器	27
第23図 土器分布（第1群）	28
第24図 土器分布（第2群）	28
第25図 グリッド出土土器	30
第26図 土器分布（第3群）	31
第27図 土器分布（第4群）	31
第28図 土器分布（第5群）	32
第29図 繩文時代石器	33
第30図 S E 004	34

## 表 目 次

第1表 第1ブロック石器属性表	19
第2表 第1ブロック組成表	19
第3表 第2ブロック石器属性表	20
第4表 第2ブロック組成表	20
第5表 第3ブロック石器属性表	20
第6表 第3ブロック組成表	21
第7表 第4ブロック石器属性表	21
第8表 第4ブロック組成表	21
第9表 ブロック外石器属性表	21
第10表 繩文時代石器属性表	33

## 図版目次

図版1 一鉄田基兵衛山遺跡の周辺地形	S I 006
図版2 第1～3ブロック全景（西から）	繩文時代前期土器集中地点
第1～3ブロック全景（南から）	図版7 S K 001 S K 002
第1ブロック	S K 008 S K 003
図版3 第3ブロック（南から）	S K 007遺物出土状況 S K 007
第3ブロック（南西から）	S E 004
第4ブロック（南から）	図版8 S I 006出土土器 S K 008出土土器
図版4 第1・2・3ブロック出土石器	S K 003出土土器 S K 007出土土器
図版5 第4ブロック出土石器	グリッド出土土器
図版6 S I 006遺物出土状況	繩文時代石器

# I はじめに

## 1 調査の概要

### (1) 調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターでは、新東京国際空港二期予定地内に所在する遺跡について、昭和51年から千葉県教育委員会の指導のもとに計画的・継続的に発掘調査を実施してきている。平成元年、この新東京国際空港の関連事業として、新東京国際空港公団は、香取郡多古町一鷹田甚兵衛山に刈り草置場の整備を計画した。この刈り草置場の整備は新東京国際空港公団の地域との共生事業の一環として、空港予定地内で生み出された刈り草を、周辺農家のために堆肥として利用してもらうことを目的としていた。新東京国際空港公団は刈り草置場整備に当たり、区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて千葉県教育委員会に照会を行った。計画地の台地上は周知の遺跡内ではなかったが、空港予定地内の遺跡群に隣接し遺跡としての広がりが予想されたため、千葉県教育庁文化課は試掘調査を行った。調査の結果、旧石器時代の遺物が検出され、新発見の遺跡として認知されることになった。遺跡の取扱いについては千葉県教育庁文化課と協議が重ねられた。その結果、事業計画の変更は困難であり、やむなく記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、新東京国際空港公団との間に平成7年8月に発掘調査の委託契約が締結された。遺跡の名称は多古町教育委員会と協議を行い、「一鷹田甚兵衛山」遺跡と名付けられた。

一鷹田甚兵衛山遺跡の調査は、平成7年8月1日から開始された。平成7年10月6日までに調査対象面積7,875m<sup>2</sup>全域の上層・下層確認調査が行われた。その結果、上層については遺構の広がりが確認されなかつたため確認調査で終了となつたが、下層については調査区北側と東側の2か所に旧石器時代の遺物が分布することが明らかとなり、521m<sup>2</sup>が下層本調査対象範囲となり、引き続き下層本調査に移行した。下層の本調査は10月26日をもって終了した。

調査の結果、旧石器時代の石器集中地点3か所(調査終了時点の地点数)、縄文時代前期の遺物集中地点1か所、縄文時代早期の住居跡1軒、陥穴3基、縄文時代前期の土坑2基等の遺構とともに該期の遺物が検出された。この中には、特に旧石器時代の荒屋型彫器のように、全国的に見ても貴重な資料が検出された。

翌、平成8年度に整理作業が開始された。整理作業は、2か月間の期間の整理を要することとなり、ここに、平成8年度をもって報告書刊行の運びとなつた。

発掘調査及び整理作業に関わる担当職員は、下記のとおりである。

平成7年度 平成7年8月1日～10月26日

(発掘調査 上層・下層確認、下層本調査) 主任技師 矢本節朗

平成8年度 平成8年10月1日～11月30日

(整理作業 水洗・注記～原稿執筆、刊行) 主任技師 矢本節朗

### (2) 調査の方法

調査区の設定 調査対象範囲全域を、公共座標に合わせて東西南北に50m×50mの方眼網を設定し、大

グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3、……とし、西から東へA、B、C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は5m×5mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南西隅を99とした。最小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、たとえば、2B34のようにした（第1図）。

**上層確認調査** 繩文時代以降の上層の調査は、調査区全域に南北方向に幅0.8mの調査坑を基本として、調査対象面積の8%の密度で設定し遺構、遺物の分布を確認し、遺構の確認された所及び遺物の分布の密な範囲を拡張し本調査に移行している。繩文時代前期の土器集中地点の分布範囲は狭く、各遺構の数も少なく散漫な分布を示すため、上層の調査は確認調査範囲を拡張して終了した。

**下層確認調査** 旧石器時代の下層（ローム層中）の確認調査は、調査区全域に2m×2mの調査坑を調査対象面積の8%の密度で設定し、石器等の遺物が出土した地点について周囲に拡張し、遺物集中の存否と広がりを追求する方法をとっている。

**本調査** 確認調査の結果に基づき、上層の本調査は不要とした。その後、下層の確認調査を行い、その結果に基づき、石器が出土した地点の周囲を拡張して調査を行った。その過程で2か所で石器集中地点が広がることが確認されたため、石器集中地点の精査を行った（第2図）。

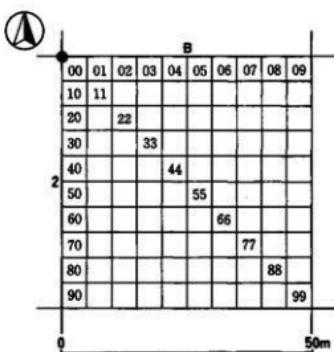
**遺構番号** 調査時点においては、検出された遺構に対して精査を行った順に001号跡、002号跡……のように一連番号を付した。本書では、調査時の遺構番号を踏襲して表記していくが、遺構番号の頭に遺構の種別を示す記号を追加した。S Iは堅穴住居跡、S Kは土坑及び土廣、S Eは井戸、S Dは溝状遺構を意味する。したがって文中では例えばS I 006、S E 004、のように表記した。

## 2 遺跡の位置と環境

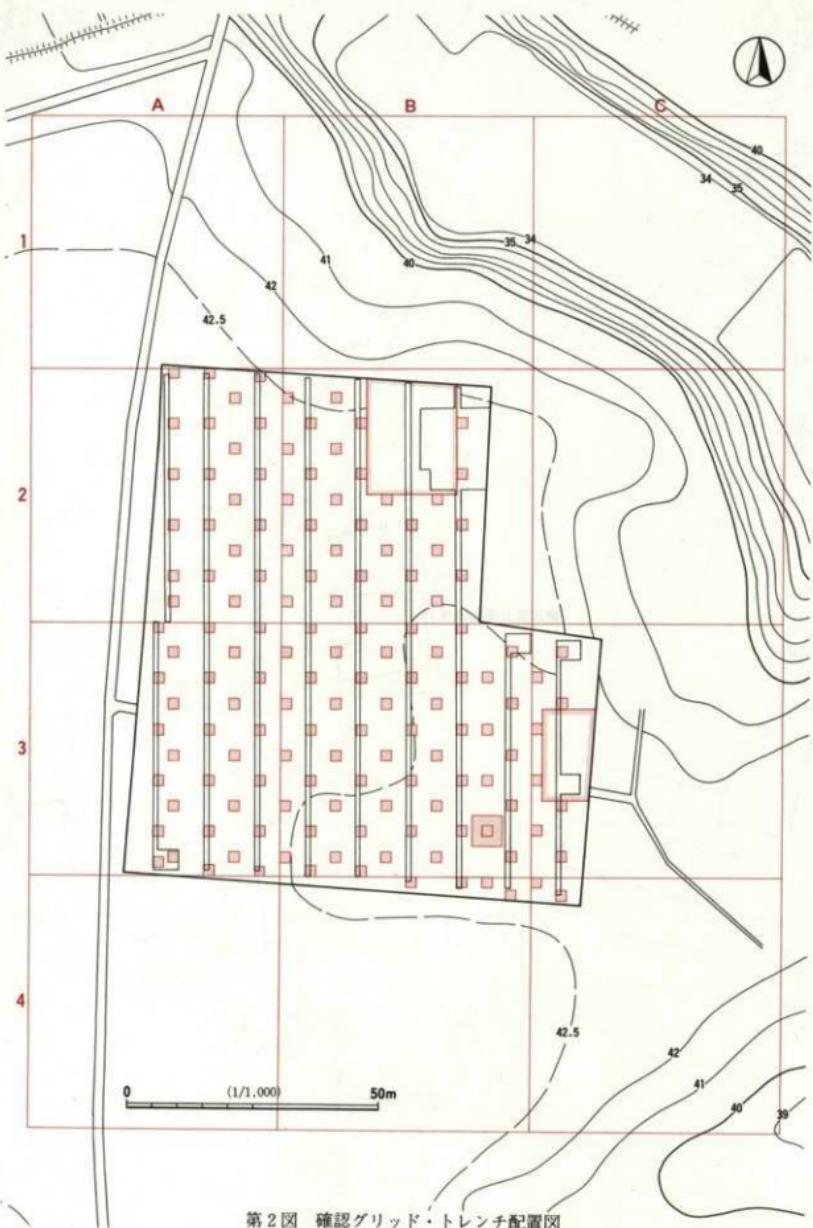
### （1）遺跡の位置と周辺の遺跡

一鉄田甚兵衛山遺跡は、千葉県香取郡多古町一鉄田字甚兵衛山454-1ほかに所在し、千葉県北部に広がる下総台地に立地している。本遺跡周辺の下総台地北東部は北総台地と呼ばれ、ちょうど新東京国際空港地域を分水界として、北は、利根川に流入する大小の河川の開析により支谷が複雑に入り込む地形を呈し、南は、九十九里浜に注ぎ込む幾筋もの河川が南北方向に流れ、この河川から分かれる小支谷による開析で南北方向に緩やかに傾斜する幅の狭い樹枝状の台地が延びている。

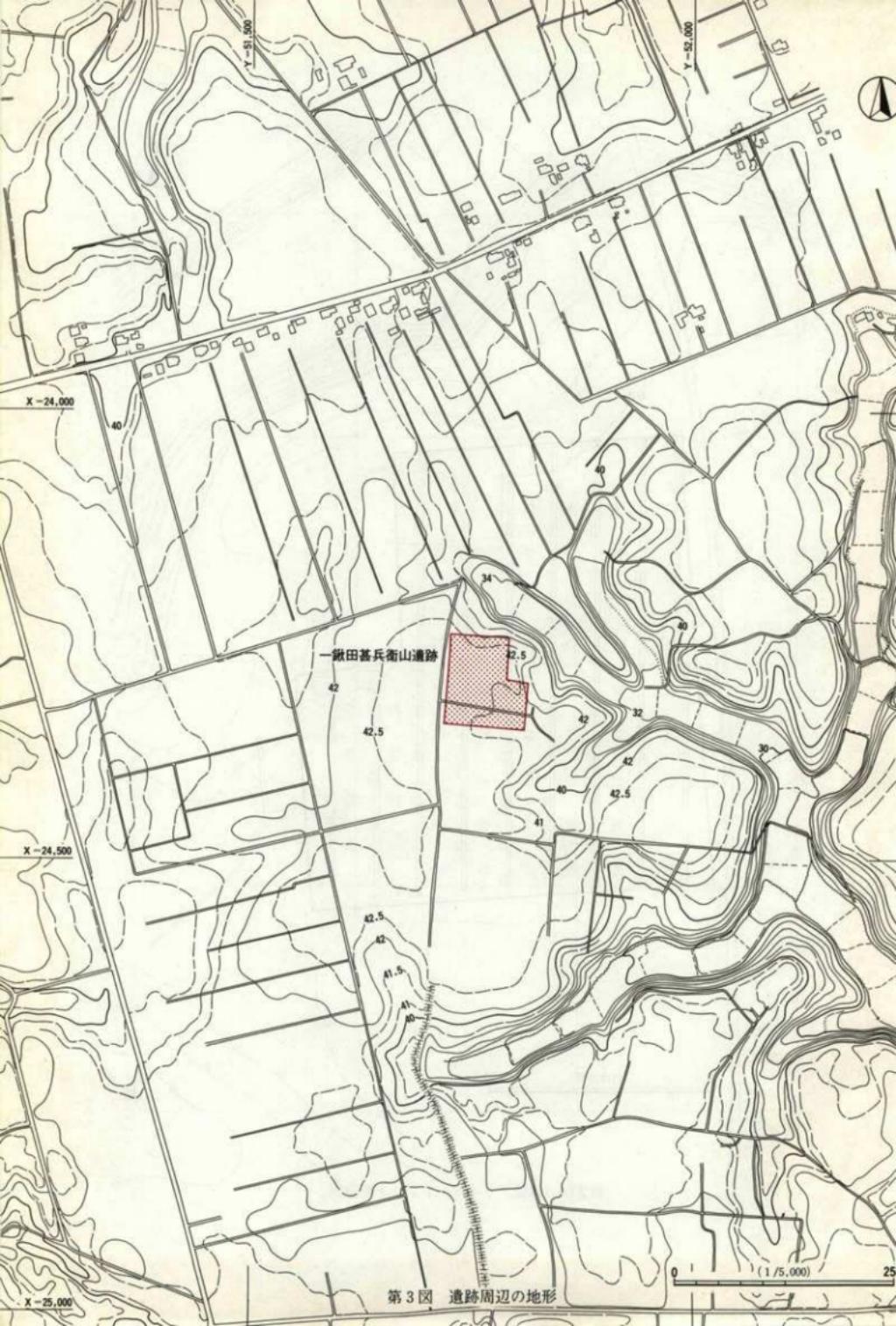
一鉄田甚兵衛山遺跡をのせる台地は、利根川に流入する尾羽根川の源流部と九十九里浜に注ぎ込む栗山川支流の高谷川源流部に挟まれた台地である。遺跡周辺の台地の標高は42m前後で、低地までの比高差はおよそ20mである。遺跡付近では、東側で高谷川の小支谷が東方向から入り込んでいる。本遺跡はこの小支谷の西側に面する台地縁辺部に当たる（第3図）。



第1図 グリッド配置図



第2図 確認グリッド・トレンチ配置図



第3図 遺跡周辺の地形

本遺跡の周辺の台地には新東京国際空港予定地内の遺跡を初め多くの遺跡の存在が知られ、調査がされた遺跡も少なくない。次に、本遺跡の時期に関係する時期の周辺遺跡を概観しておきたい（第4図）。

旧石器時代の遺跡としては、新東京国際空港予定地内で大規模な調査が実施されており、後期旧石器時代の初期から終末期の細石刃石器群の時期まで豊富な資料が存在する<sup>1)</sup>。特に、本遺跡と関係の深い遺跡を挙げると、東峰御幸畠西遺跡（空港No.61遺跡）が存在する。III層上面からIIc層にかけて荒屋型彫器と湧別技法による細石刃石核が見られ注目される<sup>2)</sup>。十余三稻荷峰遺跡（空港No.67遺跡）では野岳・休場型の細石刃石核が多量に検出されている。本遺跡近隣の遺跡としては、西側に隣接して一鉢田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡）のVII層から珪質頁岩製の大形石刃を石核の素材としている石器群が検出されている<sup>3)</sup>。高谷川最奥部の小支谷を挟んで東側には一鉢田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡）があり、III層からナイフ形石器終末期の石器群が検出されている<sup>4)</sup>。

縄文時代の遺跡としては、西側の小支谷を挟んで一鉢田甚兵衛山南遺跡（空港No.12遺跡）が位置する。有舌尖頭器や隆起線文土器が出土した遺跡として著名である<sup>5)</sup>。早期撫糸文期の住居跡が検出されている遺跡としては、空港予定地内の遺跡群が知られているが、取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）では、撫糸文期の住居跡が6軒検出されており当地域の様相を示す資料として重要である<sup>6)</sup>。香山新田中横掘遺跡（空港No.7遺跡）でも撫糸文期の住居跡が1軒検出されている<sup>7)</sup>。本遺跡で主体を占める前期後半の浮島式・興津式土器群が出土する遺跡としては、東対岸の一鉢田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡）遺跡が知られる。遺跡の中で5地点に分布し、それぞれ土器群の組成が異なるという特徴ある様相を示している<sup>8)</sup>。本遺跡は旧石器時代、縄文時代を主体とする遺跡で、これらの空港予定地内の遺跡群と密接に関係していたと考えられる。

## （2）層序区分

一鉢田甚兵衛山遺跡は、前項で説明したように栗山川支流の高谷川の最上流部に位置している。この台地上は地形面では下末吉面（S面）に比定されている。一鉢田甚兵衛山遺跡の調査区域は北寄りの台地縁辺部の平坦地である。上層調査過程で調査区北側中央部には埋没谷の形成が観察されている。旧石器時代の石器集中地点はこの埋没谷の東側の平坦面に分布していた。本遺跡での土層の特徴は、耕作及び削平が著しく、III層（ソフトローム）の下部にまで擾乱が及んでいたことである。この擾乱により、縄文前期の土器集中地点と旧石器時代のブロックが影響を受けていた。

層序区分を行った結果を以下に示した（第5図）。

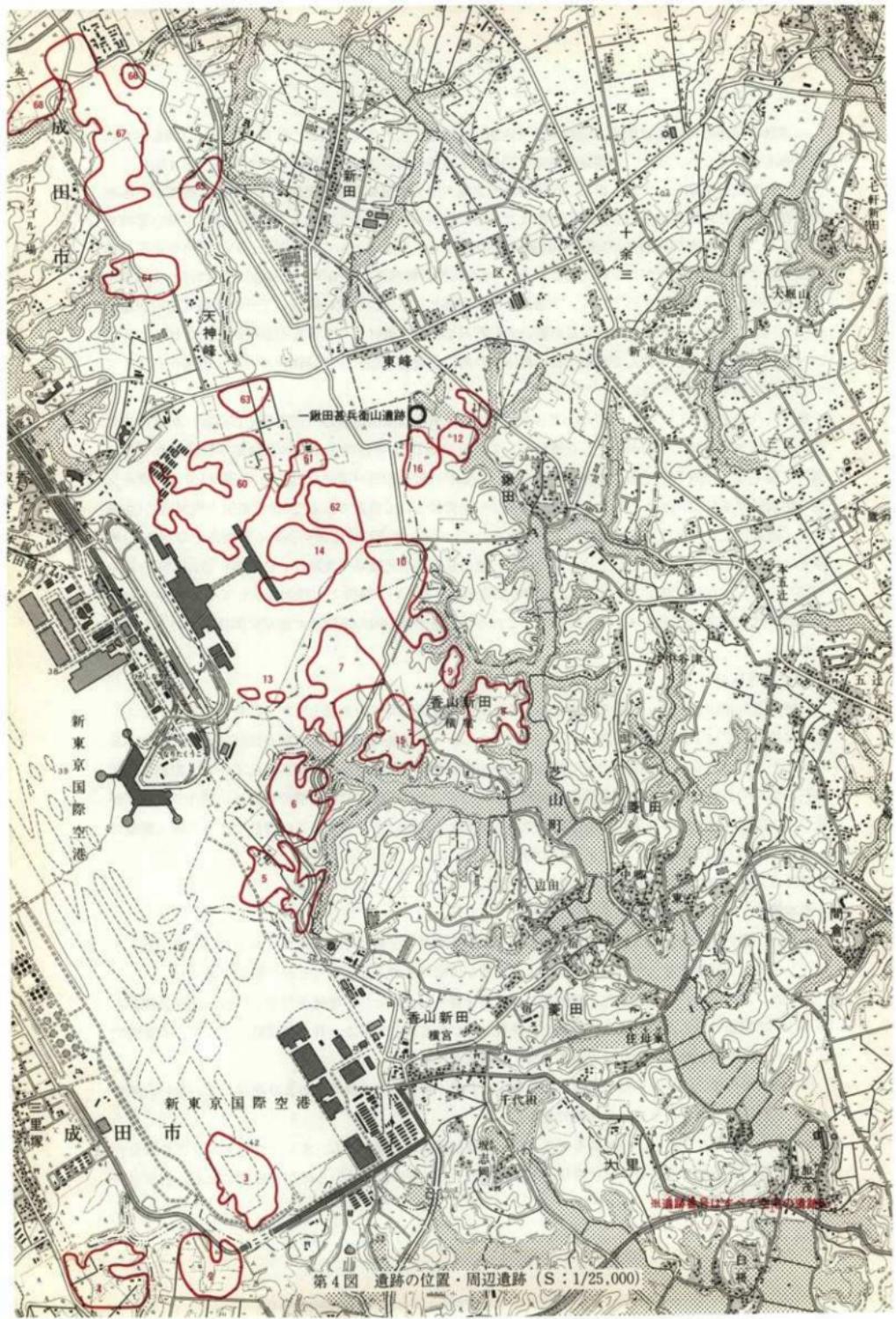
### 基本層序

I 層：褐色土。表土及び耕作土、盛土。削平され天地返しを受けたようにローム小ブロックが混入する。本遺跡では、削平及び耕作によりI層がIII層にまで入り込むことが一般的であった。

II b層：赤褐色土。色調は赤色、黄褐色スコリアを含み、全体として赤味を帯びている。埋没谷側のみで確認される。いわゆる「新期テフラ層と思われる層」である。II b層は第4ブロックの壁面で一部確認されているだけで基本土層では確認されなかった。

II c層：黒褐色土。ローム層への漸移的な層であるが、本遺跡では黒色はあまり発達していない。部分的にII c層が残っている程度である。

III 層：黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層と呼ばれる層である。オレンジ色スコリアを微量含む。本遺跡ではIII層の波状帶はIV・V層を切ってV層に及んでいるのが一般的である。層厚は30



cm～40cm前後である。本遺跡の旧石器時代の文化層はこの層に集中が観察された。

IV・V層：黄褐色ローム土。本遺跡では、III層が厚くソフトローム化し、IV層を取り込むように堆積し、IV層とV層の岐別は不可能であった。赤色、黒色、白色、オレンジ色スコリアを少量含む。やや暗色であり、層厚は20cm前後。

VI層：明黄褐色ローム土。始良Tn火山灰層（A.T層）である。白色バミスを多量に含む。A.Tが濃密に分布している範囲をVI層としたが、最も集中する部分は層のやや上位部分である。層厚は約15cmである。

VII層：暗黄褐色ローム土。第二黒色帯上部に相当する層である。VI層よりやや暗色である。赤色、白色、黒色スコリアを少量含む。A.Tはこの層まで拡散している。層厚は約20cmである。

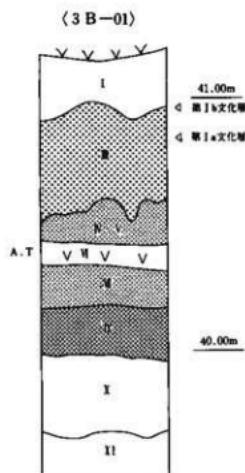
IX層：暗黄褐色ローム土。第二黒色帯下部に相当する層である。ややVII層より暗色化している。下部で粘性が強まる。土質的には分層は困難であったが、A.Tの拡散が見られなくななる部分から下位をIX層としている。層厚は30cm前後である。

X層：明褐色ローム土。立川ローム最下層に相当する。IX層より明るくなる。しまりはあるが、粘性はやや強くなる。少量の赤褐色スコリヤを含む。層厚は40cm前後である。

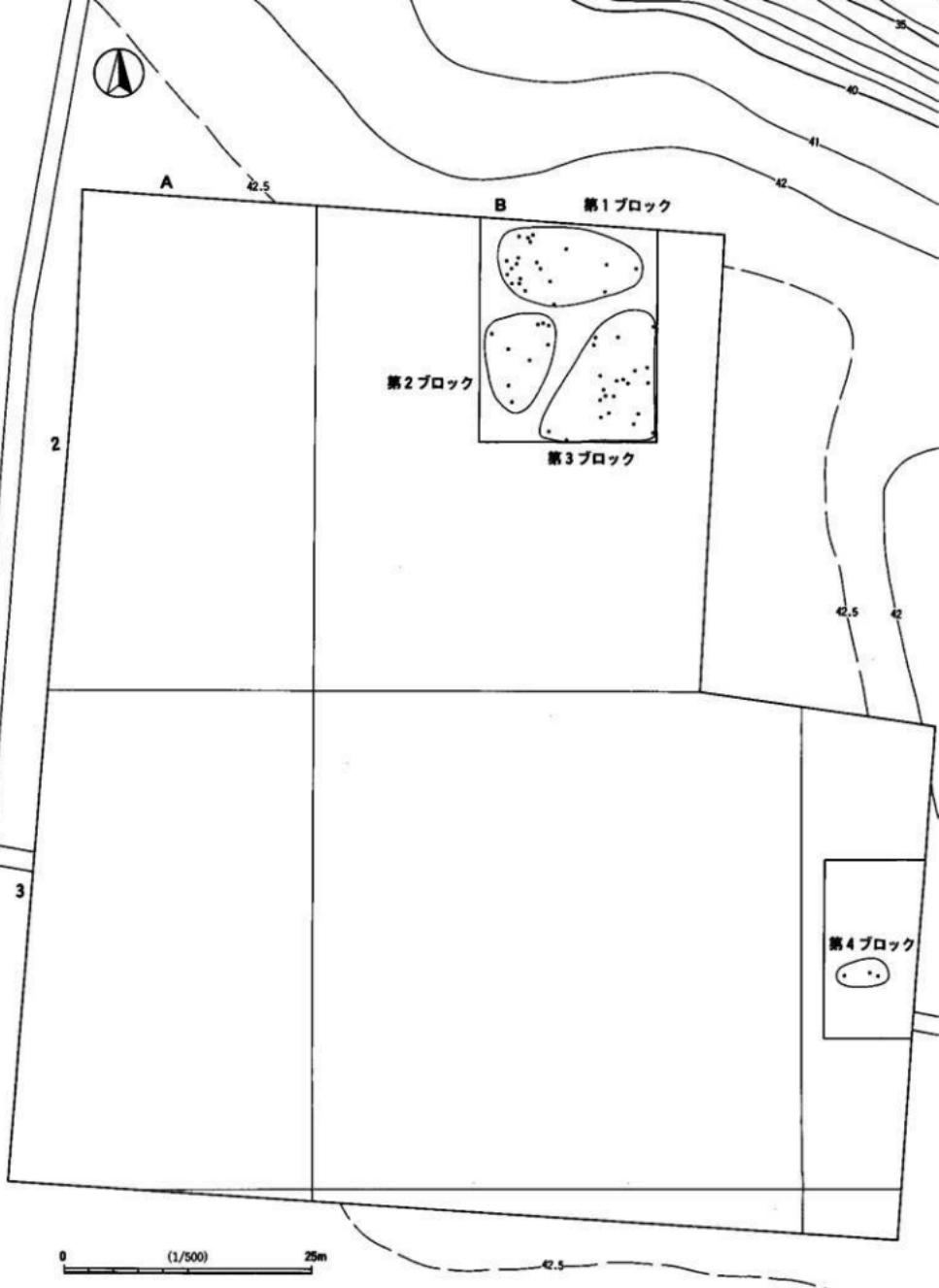
XI層：褐色ローム土。武藏野ローム最上部層に相当する。X層との境界は、不整合であり、粘性の相違により波状帶を呈している。軟質で粘性が強い。乾燥すると堅くなり、本層よりクラックが発達する。

#### 注

- 1 空港予定地内所在遺跡の遺跡名称については、下記の文献を参照のこと。  
新田浩三 1994 「空港予定地内所在遺跡の名称の変更について」『研究連絡誌40』(財)千葉県文化財センター
- 2 島立 桂・永塚俊司 1997 「千葉県における北方系細石刃石器群」「第4回 石器文化研究交流会－発表要旨－」石器文化研究会
- 3 新田浩三 1995 「下縦型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16-20周年記念論集－』(財)千葉県文化財センター
- 4 小久賀隆史・新田浩三 1995 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX 一嶽田甚兵衛山北遺跡(空港No11遺跡)」(財)千葉県文化財センター
- 5 鈴木道之助 1986 「新東京国際空港No12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『千葉県文化財センター研究紀要10-10周年記念論集－』(財)千葉県文化財センター
- 6 小久賀隆史・新田浩三 1994 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII 取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)」(財)千葉県文化財センター
- 7 西川博孝ほか 1984 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV-No.7遺跡－」(財)千葉県文化財センター
- 8 注4文献。



第5図 基本層序 (S:1/20)



第6図 旧石器時代ブロック分布

## II 旧石器時代

### 1 文化層の概要

旧石器時代の遺物集中地点は、調査対象範囲の北東端と東側の2か所で検出された。この遺物集中地点は、発掘調査終了時で3か所のブロックとして把握したが、整理作業の過程で平面分布密度、垂直分布、母岩別分類等の検討を行い、4か所のブロックとして再構成された。このブロック群は調査区の東側から北側に入り込む小支谷に面する台地のより縁辺に位置することになる。遺物集中地点の確認されたところは比較的平坦な面であるが、その部分から谷の方向へ急速に傾斜していた。比較的立川ロームの堆積の安定していた所では、遺物はIII層下部からIII層上面に集中して分布している。出土層準はIII層に帰属すると考えられる。ところで、本遺跡の調査の発端となった、県文化課の試掘調査で検出された細石刃石核は、調査区北東隅のIII層上面で検出されている。周囲を精査したが同一母岩資料や細石刃石器群の関係資料は検出されなかった。また、先述したように北東側の遺物集中地点では、I層（盛土）がIII層下部にまで入り込み、遺物は大部分がプライマリーな土層からの検出でなく、ブロックの分布状況も散漫な方を示しており、ブロックの認定及び出土層位の認定が困難であった。北東側の調査区では、視覚的に見て3つのブロックに分離された。これらのブロックは第1ブロック～第3ブロックとする。ブロック間に同一母岩の個体も存在することから、これらのブロック群は同一の文化層と把握される。細石刃石核は文化層を異にすると考えられるが便宜的に、ブロックに含めて扱うこととする。東側の集中地点はIII層上部で検出されており、第4ブロックとした。確認調査で検出された遺物からあまり資料が増えなかったが、いわゆる「荒屋型彌器」が検出されている。この資料についても、同じブロックのほかの石器とは異質で単独資料的な色彩が強いが、第4ブロックの中に含めて扱うこととする。今回の調査ではこの2つの文化層が検出された。層位的な重層関係が十分明確でなく、出土遺物による文化層の分離のため、文化層を亜文化層的に分離して考えた。第1ブロック～第3ブロックを第Ia文化層、第4ブロックを第Ib文化層とする。これらの分布状況とブロックの名称を第6図に示した。

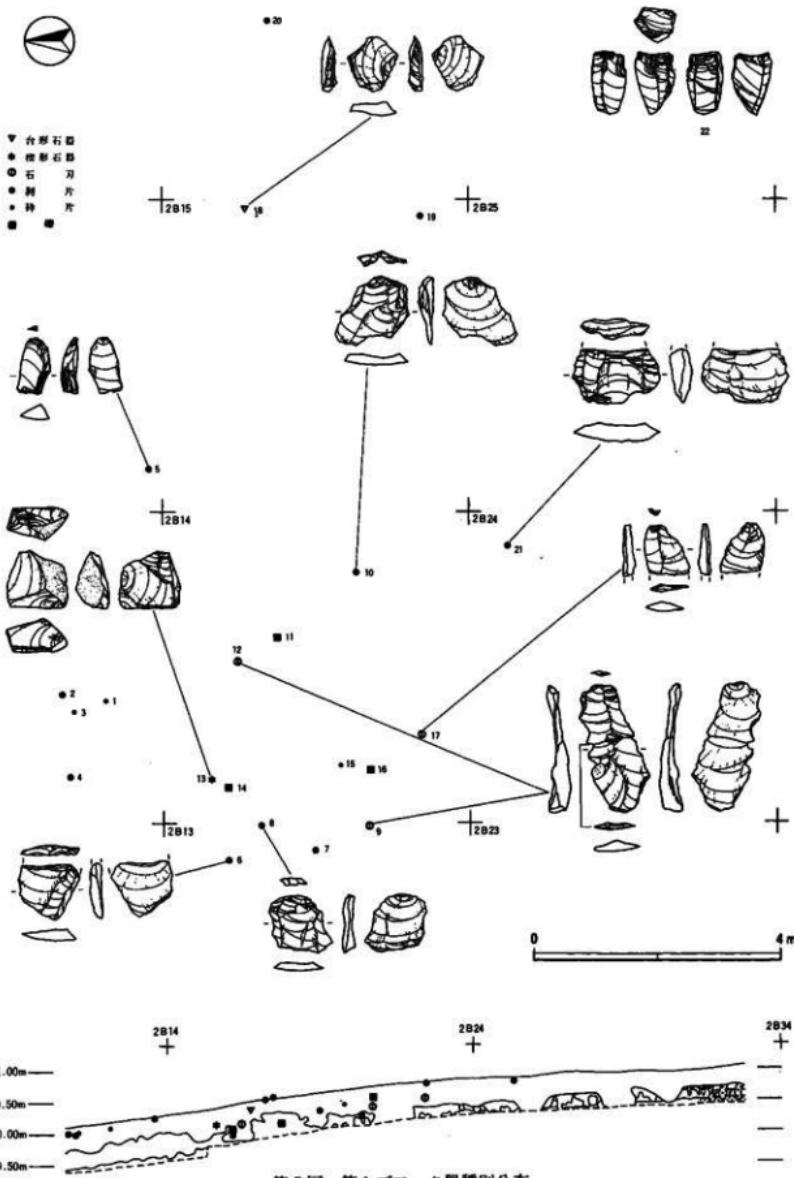
### 2 ブロック各説

#### (1) 第1ブロック～第3ブロック

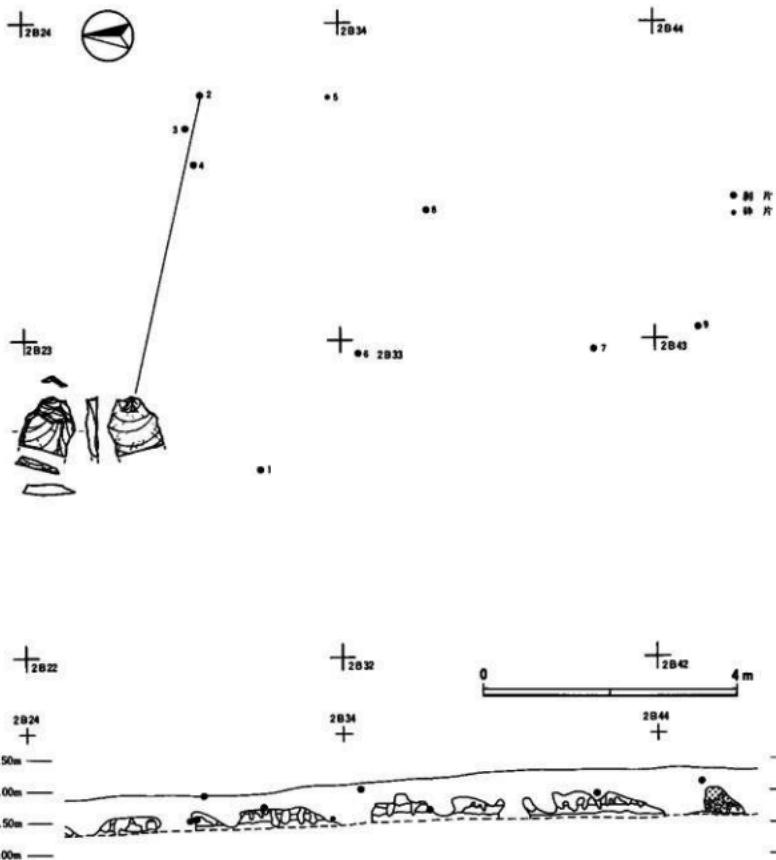
##### ① 第1ブロック（第7・10・11図、表1・2、図版1・4）

**分布状況** 調査区北西端で調査されたブロックである。調査区の北方向の小支谷に面する台地肩部の斜面に当たる。ブロックの西側には埋没谷の谷頭が位置し、ブロックの分布範囲の北西側から急速に傾斜している。南側で第2ブロックと接する。

遺物総数は24点である。その分布は散漫であるが、ブロックの北西隅にやや分布密度の高い部分があり、そこから東方向に分布が希薄になっている。2B04・05区から2B13・14・15・16・24区にかけて梢円形状に分布する。分布範囲は南北7.2m、東西13.4mを測る。垂直分布ではおよそ0.9mの高低差がある。土層断面の投影ではI層からIII層にかけて分布している。これは、III層がほとんど擾乱を受けているためで、本来のローム層の堆積状況を復元的に予測すれば、III層上部～中部にかけての出土層位ではないかと考え



第7図 第1ブロック器種別分布



第8図 第2ブロック器種別分布

られる。なお、県文化課の試掘坑（TP11）は2B14区に当たる。

**母岩別資料** 12母岩が認められる。流紋岩が1母岩10点、チャートが7母岩7点、ガラス質黒色安山岩が1母岩3点、珪質頁岩が1母岩1点、凝灰岩が1母岩1点、瑪瑙が1母岩2点を数える。流紋岩1の母岩以外はブロック内で単独あるいはごく少數の母岩となっている。流紋岩1はブロックの分布密度の高いところを中心に分布範囲の全域に分布している。本ブロックの台形石器及び石刃はこの流紋岩1の母岩を素材としている。

## ② 第2ブロック（第8・10・11図、表3・4、図版2・4）

**分布状況** 調査区北側、第1ブロックの南側で調査されたブロックである。調査区の北方向の小支谷に面する台地縁辺部に位置しており、ローム層は北に向かって緩やかに傾斜している。現況では、第1ブロ

ックと同様にIII層以上の立川ローム層が大部分削平を受けていた。北側で第1ブロック、南東側に第3ブロックが位置する。

遺物総数は9点である。その分布は散漫である。ブロックの北西側にやや密集して分布し、ほかは疎らに分布する。2B23・24区から2B33・34区にかけて北西から南東方向に長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北8.2m、東西5.8mを測る。垂直分布ではおよそ0.6mの高低差があり、III層が擾乱を受けているためか、遺物の上下への拡散が大きい。土層断面への投影では、I層からIII層にかけて分布しているが、大部分は擾乱を受けている層であるI層からの出土である。出土層位は明白ではないが、III層の中部から上部にレベルを求めることができる。

母岩別資料 6母岩が認められ、黒曜石が1母岩3点、珪質凝灰岩が1母岩1点、チャートが3母岩3点、瑪瑙が1母岩1点を数える。黒曜石1が3点とやや多いが、その他は単独母岩あるいは2点ほどの母岩に止まる。黒曜石1はブロックの南側に散漫に分布する。

#### ③ 第3ブロック（第9～11図、表5・6、図版2～4）

分布状況 第2ブロックの南東側で調査されたブロックである。第1、2ブロックと同様に調査区の北方向の小支谷に面する台地縁辺部に位置しており、ローム層は北に向かって緩やかに傾斜しているが、第1、2ブロックに比して傾斜は緩やかである。現況では、VI層部分にまで後世の擾乱を受ける所があり、III層の大部分は擾乱を受けていた。北西側に第2ブロックが位置する。

遺物総数は24点である。その分布は比較的まとまっているが、ブロックの中心部に密集して分布し、中心からブロックの周縁部に向かって放射状に分布が希薄になっていく。2B25・26・35・36区から2B44・45・46区にかけて北東～南西方向にやや長く南側が膨らむ楕円形状に分布する。分布範囲は南北10.9m、東西10.7mを測る。垂直分布ではおよそ0.6mの高低差がある。土層断面への投影では、I層からIII層にかけて分布し、大部分がI層の擾乱層からの出土であるが、プライマリーな土層状態の部分では、III層の中部から上部に出土層位が見られる。

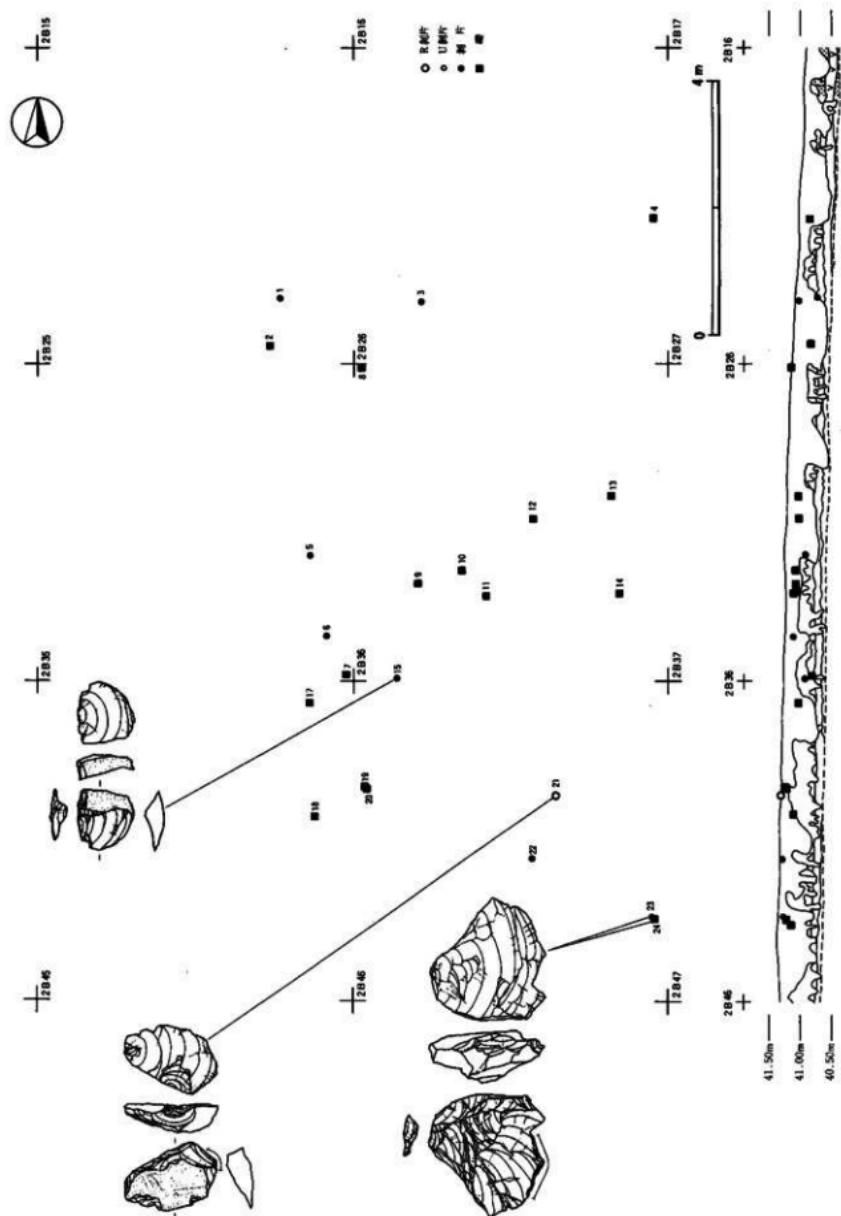
母岩別資料 19母岩が認められ、その内訳はチャート6母岩6点、流紋岩6母岩6点、瑪瑙4母岩7点、安山岩1母岩1点、凝灰岩1母岩1点、砂岩1母岩3点である。チャート、流紋岩の母岩は、単独母岩の疎を構成しており、その疎の母岩を除くと、瑪瑙の母岩が剥片類の大部分を占める。点数の多い母岩を挙げると、瑪瑙3の3点、瑪瑙4の2点であり、特定の母岩に集中した母岩の消費は見られない。母岩と器種の関係を見ると瑪瑙4の母岩に細部加工のある剝片、使用痕のある剝片があるのみであり、主要な利器が認められない。

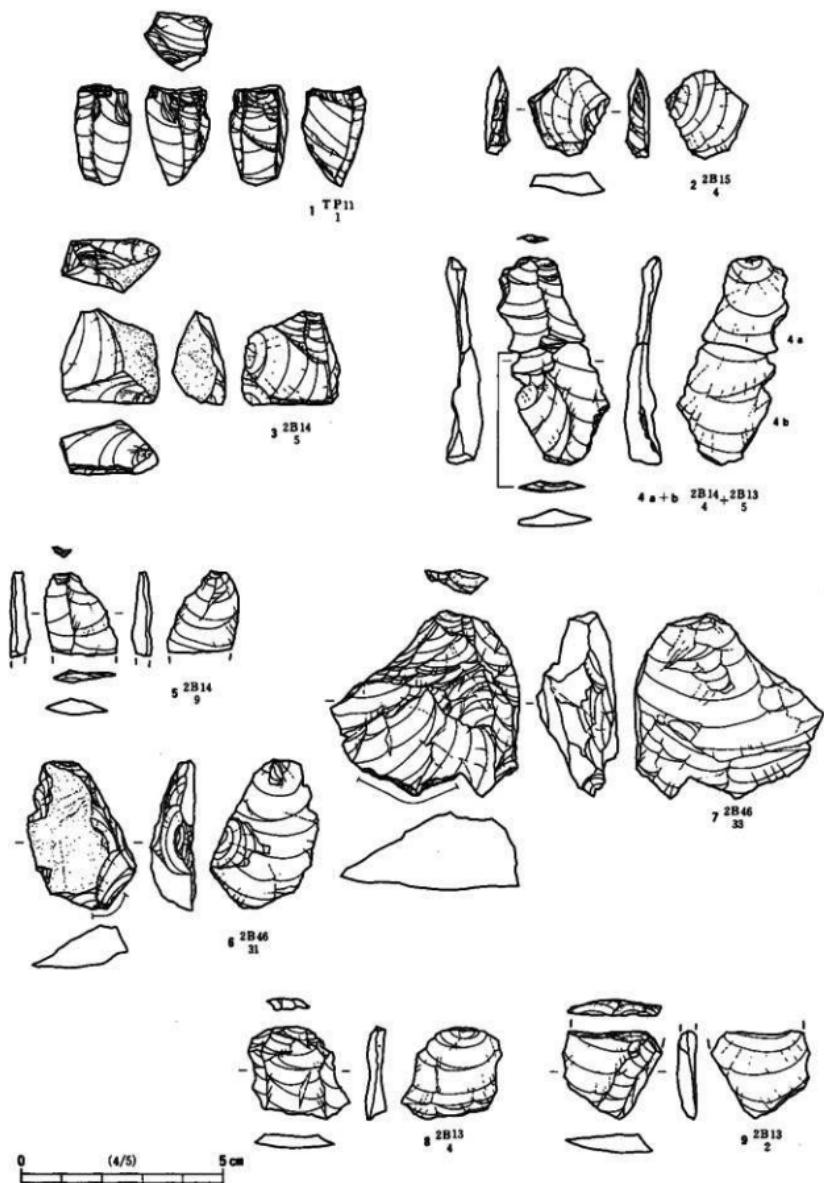
#### ④ 第1ブロック～第3ブロック出土遺物（第10・11図、第1～6表、図版4）

第1ブロックから第3ブロックは同一の地区に広がるブロックであり、明確な確認はないものの同一時期のブロック群と把握した。ここでまとめて器種ごとに説明を加えていく。

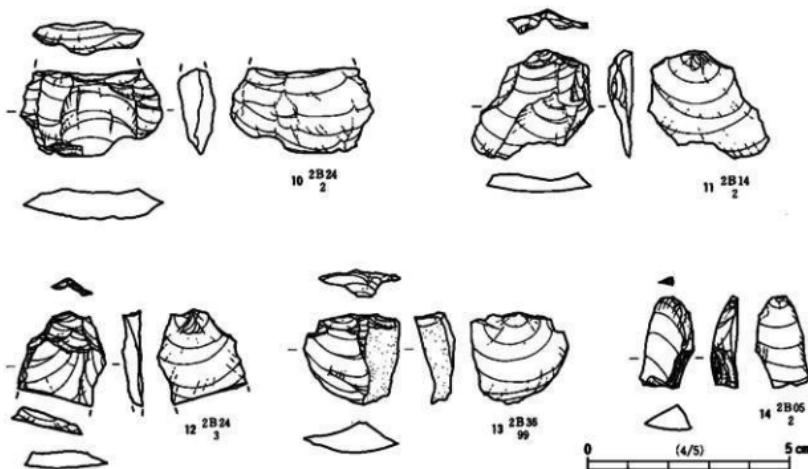
1は細石刃石核である。県文化課試掘調査による遺物であり、III層上面からの出土である。第1ブロックの分布範囲からの出土ということになるが、ほかの石器とは異質であり、この細石刃石核は別の文化層のものが混在したものと考えている。左面が石核素材の主要剝離面であり、上面方向からの整形により角錐状の器体に仕上げられ、単節打面を設けている。打面には疎らな調整が認められる。細石刃の削出は正面及び、左面に認められる。残存する剝離面からは、最大幅4mm～5mm、最大長25mm～30mm程の細石刃が推定される。石材は分類時点ではチャートと分類したが、一般的なチャートではなく、乳白色を呈した

第9図 第3ブロック器種別分布





第10図 第1・2・3ブロック出土石器1



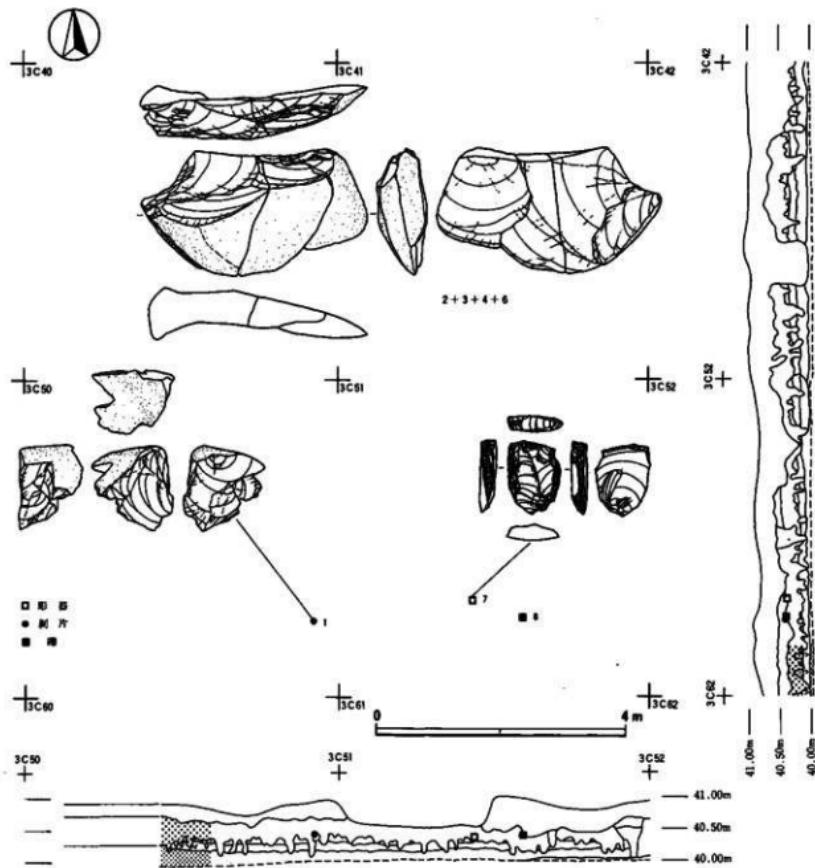
第11図 第1・2・3 ブロック出土石器 2

色調であり、凝灰岩の珪質化した石材である可能性が高い。2は台形石器とした。背面の左側面にプランディング状の調整が連続する。先端がペン先状になる台形石器と分類される。3は楔形石器である。素材を横位に用いており、上端からは階段状剥離痕と細長い剥離痕、下端からは潰れたような微細剥離痕が観察される。4・5は石刃である。いずれも同一母岩の流紋岩を石材としている。4は下半部に最大幅をもつ平面形状を呈する。中央部で切断状に割れている。下半部の背面右側縁には微細な調整痕が認められる。5は下半部を切断状に欠損するため形状は不明であるが、4と同様の形状である可能性が高い。6は細部加工のある剥片である。主要剥離面の左側縁に平坦な剥離面が認められる。7は使用痕のある剥片である。背面下端部に微細剥離痕が連続する。6・7はいずれも瑪瑙を石材とする。8～14は剥片である。8～10は流紋岩1を母岩とする。これらは石刃技法により剥片剥離されたと思われる剥片であり、さらに9・10のように器体を横方向に切断されていると考えられる。14は良質なチョコレート色した珪質頁岩を石材としている。

(2) 第4ブロック (第12~15図、表7・8、図版3・5)

**分布状況** 調査区東端で調査されたブロックである。調査区北方向の谷からノッチ状に東方向に入り込む小支谷に面する台地縁辺部に位置している。本ブロック付近では立川ローム層の堆積はほぼ平坦であるが、やや南方向に緩やかに傾斜している。現況では、III層上部まで一部削平を受けていた。

遺物総数は8点であり、小規模のブロックとなっている。確認調査で、3C51区の北西隅でIII層上面から5点の石器が検出され、拡張したがその広がりは希薄であった。3C50・51区に散漫に分布する。分布範囲はおよそ南北3.8m、東西3.4mを測る。垂直分布ではおよそ0.1mの高低差がある。土層断面への投影では、ブロックの東側の土層観察用のベルトでIII層上面からIIc層下部に投影され、III層上面に産出層位を求めることができる。

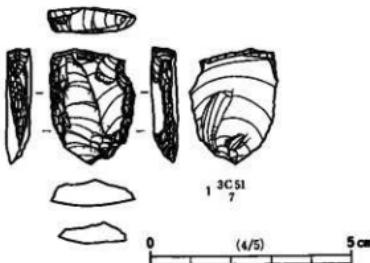


第12図 第4ブロック器種別分布図

**母岩別資料** 3母岩が認められ、その内訳はホルンフェルス1母岩6点、珪質頁岩1母岩1点、砂岩1母岩1点である。個々の母岩で点数の多いものは、ホルンフェルス1の6点であり、他は、単独の母岩となっている。母岩と器種の関係を見ると、ホルンフェルス1の母岩により剝片が生産されている。また、珪質頁岩2は良質のチョコレート色の珪質頁岩であり、いわゆる荒屋型彫器の石材となっている点が注目される。

**出土遺物** 荒屋型彫器が検出されていることが特徴的である。

1は彫器である。先述したが、いわゆる荒屋型彫器である。チョコレート色の良質な珪質頁岩を石材としている。素材はやや厚味のある石刃状の剝片であり、素材の打面部を器体の基部側に設け、両側縁に精緻な調整加工を連続させている。右側縁から左側縁に突き抜けるように穂状剝離が施され、少なくとも1回の再生が行われているようで、彫刀面は器体軸に対してやや右下がりの角度となっている。



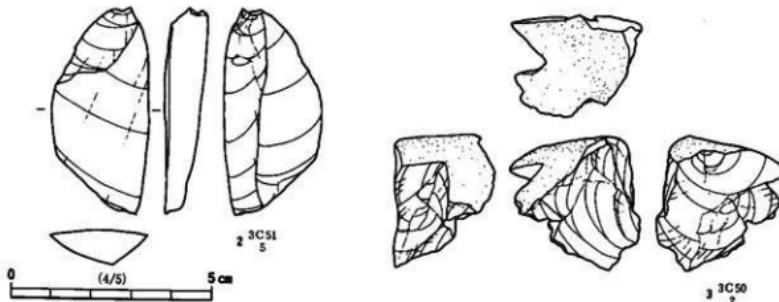
第13図 第4ブロック出土石器1

4はホルンフェルス1を母岩とする剝片の接合資料である。大形の偏平蝶から剝片剝離された4点の剝片が接合する。まず、4a+bが背面左上端を打面として剝片剝離され、その後に、同じ打面からの4cと上面からの4dが剝片剝離されている。4aと4bはその後に切断されたものであろうか。2・3は4と同一母岩の剝片である。2は縦方向からの加撃により剝片が分割されている。

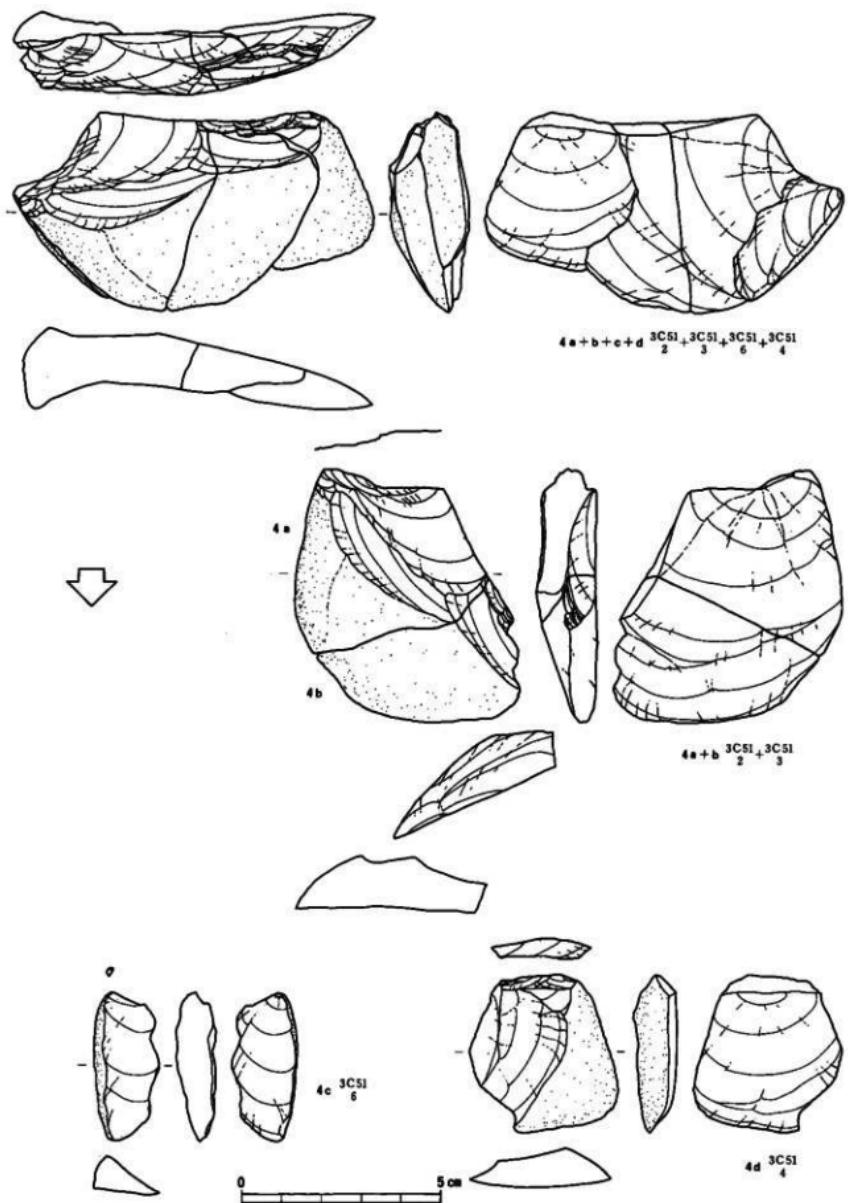
### (3) ブロック外(第2図、表9)

確認調査時に3B88区で1点遺物が検出された。周囲を拡張したが他に遺物は検出されず、単独の遺物であった。ブロックのまつりが看取されないためブロック外として扱うこととする。3B88区に分布している。出土位置を落としていないため正確ではないが、遺物はVII層から出土している。

出土遺物はチョコレート色の珪質頁岩を石材とする碎片である。実測図は図示していない。出土層位から第1ブロック～第4ブロックとは明らかに古い文化層と考えられるが、碎片だけの単独資料のため詳細は不明である。



第14図 第4ブロック出土石器2



第15図 第4ブロック出土石器 3

第1表 第1ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	同様番号	打頭	打頭	頭部	背面構成				末端	折損部位	母 基		
											I	II	III	IV	C				
1	02B040002	鋸	片	10.1	14.1	4.8	0.4		H		5	1				S	チヤー	ト1	
2	02B040003	鋸	片	20.4	25.6	5.2	2.6									M	メノウ	ウ1	
3	02B040004	鋸	片	14.9	9.3	2.0	0.4		L							B	安山岩	1	
4	02B040005	鋸	片	21.2	23.7	3.2	1.6		H							M	理賃質	1	
5	02B050000	鋸	片	22.2	13.3	6.7	1.4	14				2	1	1		107	H	瓦紋岩	1
6	02B130002	鋸	片	21.3	23.9	4.8	2.3	9		-	-	2	1			F	瓦紋灰岩	1	
7	02B130003	鋸	片	33.0	34.2	21.1	13.4		C		1					F	瓦紋灰岩	1	
8	02B130004	鋸	片	22.7	24.9	4.9	1.9	8	H		3				106	H	瓦紋灰岩	1	
9	02B130005	石 刀	刀	29.9	21.3	7.4	4.3	4b		-	-	3				F	瓦紋灰岩	1	
10	02B140002	鋸	片	27.5	29.3	6.2	3.3	11		2		5	1			103	F	チヤー	ト3
11	02B140003	鋸	片	35.8	26.4	17.6	20.5									T	チヤー	ト2	
12	02B140004	石 刀	刀	23.3	21.4	3.9	1.8	4a	H		4	1				M	瓦紋灰岩	1	
13	02B140005	柳形石器	器	23.0	23.7	12.9	7.0	3								M	安山岩	1	
14	02B140006	鋸	片	17.4	12.2	4.4	1.1									T	チヤー	ト4	
15	02B140007	鋸	片	11.4	11.1	1.8	0.2									F	瓦紋灰岩	1	
16	02B140008	鋸	片	23.8	14.4	14.5	6.2									T	チヤー	ト5	
17	02B140009	石 刀	刀	20.2	18.0	4.8	1.3	5	H		2					M	瓦紋灰岩	1	
18	02B150004	台形石器	器	22.0	19.9	5.6	2.2	2								F	瓦紋灰岩	1	
19	02B150005	鋸	片	20.3	27.2	7.2	3.5		C		1	1	1			M	メノウ	ウ1	
20	02B160008	鋸	片	14.2	25.0	6.8	1.7		H		3					H	チヤー	ト6	
21	02B240000	鋸	片	21.1	34.6	9.9	6.6	10		-	-	4	2			M	瓦紋灰岩	1	
22	TP110001	細石刃石核	片	24.6	15.7	13.8	5.9	1								T	チヤー	ト7	
23	TP110002	鋸	片	20.8	17.9	2.8	1.4			-	-	2				M	瓦紋灰岩	1	
24	TP110003	鋸	片	10.6	13.4	2.2	0.5									F	瓦紋灰岩	1	

第2表 第1ブロック組成表

	台形石器	柳形石器	石 刀	細石刃石核	鋸 片	碎 片	器	計	数量比%
安山岩1		1				1			3 12.50
理賃質岩1						1			1 4.17
チヤート1							1		1 4.17
チヤート2							1		1 4.17
チヤート3					1				1 4.17
チヤート4							1		1 4.17
チヤート5							1		1 4.17
チヤート6					1				1 4.17
チヤート7			1						1 4.17
小 計				1	2	1	3	7	29.17
基 底 岩1					1				1 4.17
メノウウ1					2				2 8.33
瓦紋岩1	1		3		4	2		10	41.67
計	1	1	3	1	11	4	3	24	100.00
組成比%	4.17	4.17	12.50	4.17	45.83	16.67	12.50	100.00	

第3表 第2ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	伴同 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 °	末端 形状	折損 部位	母 岩
											I	E	H	N	C			
1	02B230002	剝 片	18.2	21.8	8.2	2.2		H			3	4	2			84	F	メノウ1
2	02B240003	剝 片	22.8	21.1	5.3	2.4	12	3			○	2	3	2	○		M	チャート3
3	02B240004	剝 片	17.3	18.3	4.5	0.9		H			1						O	珪質板灰岩1
4	02B240005	剝 片	31.7	12.6	9.6	2.7											F	チャート1
5	02B240006	鉢 片	11.2	13.1	2.6	0.4						2					F	チャート1
6	02B330002	剝 片	15.6	17.6	1.8	0.5		P									F	黒曜石1
7	02B330003	剝 片	8.9	17.0	2.5	0.3						1					F	黒曜石1
8	02B340002	剝 片	42.5	34.5	19.8	28.2						○					F	チャート8
9	02B440004	剝 片	12.7	15.6	4.4	0.6		L			1	2				F	黒曜石1	

第4表 第2ブロック組成表

	割 合	片	塊	計	数量比%
黒曜石1	3			3	33.33
珪質板灰岩1	1			1	11.11
チャート1	1	1		2	22.22
チャート3	1			1	11.11
チャート8	1			1	11.11
小計	3	1		4	44.44
メノウ1	1			1	11.11
計	8	1		9	100.00
組成比%	33.33	11.11		100.00	

第5表 第3ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	伴同 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 °	末端 形状	折損 部位	母 岩
											I	E	H	N	C			
1	02B250017	剝 片	21.1	16.8	6.6	2.9		C							○	F	メノウ1	
2	02B250018	塊	47.0	23.1	20.8	23.2										F	流紋岩2	
3	02B260075	剝 片	9.8	18.1	4.8	1.1		L			2		1				M	メノウ2
4	02B260076	塊	35.0	14.3	11.5	7.3										H	砂岩1	
5	02B350023	剝 片	7.9	15.4	4.0	0.5		H	-	-	1	1					M	メノウ3
6	02B350024	剝 片	15.9	27.3	2.7	1.9		H			1						M	メノウ3
7	02B350025	塊	16.0	14.0	11.4	3.3										F	チャート9	
8	02B360091	塊	44.5	28.0	18.8	30.1										F	流紋岩3	
9	02B360092	塊	21.9	16.6	32.1	5.3											チャート10	
10	02B360093	塊	34.9	20.2	12.2	11.7											チャート11	
11	02B360094	塊	30.0	16.8	7.7	4.5											砂岩1	
12	02B360095	塊	20.0	17.3	6.9	6.3											流紋岩4	
13	02B360096	塊	19.0	13.1	8.5	2.4											流紋岩5	
14	02B360097	塊	15.4	12.8	9.7	2.6											流紋岩6	
15	02B360099	剝 片	22.2	23.2	9.5	3.7		H			2				○	96	H	メノウ3
16	02B440003	塊	25.1	16.8	10.0	3.6												メノウ7
17	02B450004	塊	21.5	6.8	5.6	0.7												砂岩1
18	02B450005	塊	26.0	19.8	12.8	7.0												チャート12
19	02B460030a	塊	24.5	18.1	14.5	6.8												安山岩1
20	02B460030b	塊	16.3	10.6	7.9	2.0												チャート13
21	02B460031	R 剥 片	36.2	26.5	10.3	8.4	6	P			1	3	2	1	○	84	F	メノウ4
22	02B460032	剝 片	26.6	18.0	8.0	2.4		H			2		2					珪質灰岩2
23	02B460033a	U 剥 片	45.7	47.1	20.0	35.8	7				6	1	1	1		101	H	メノウ4
24	02B460033b	塊	39.0	23.6	22.9	33.1												チャート14

第6表 第3ブロック組成表

	R側片	U側片	剥片	器	計	数量比%
安山岩1				1	1	4.17
チヤート9				1	1	4.17
チヤート10				1	1	4.17
チヤート11				1	1	4.17
チヤート12				1	1	4.17
チヤート13				1	1	4.17
チヤート14				1	1	4.17
小計				6	6	25.00
凝灰岩2			1		1	4.17
メノウ1				1	1	4.17
メノウ2				1	1	4.17
メノウ3				3	3	12.50
メノウ4	1	1			2	8.33
小計	1	1	5		7	29.17
流紋岩2				1	1	4.17
流紋岩3				1	1	4.17
流紋岩4				1	1	4.17
流紋岩5				1	1	4.17
流紋岩6				1	1	4.17
流紋岩7				1	1	4.17
小計				6	6	25.00
砂岩1				3	3	12.50
計	1	1	6	16	24	100.00
組成比%	4.17	4.17	25.00	66.67	100.00	

第7表 第4ブロック石器属性表

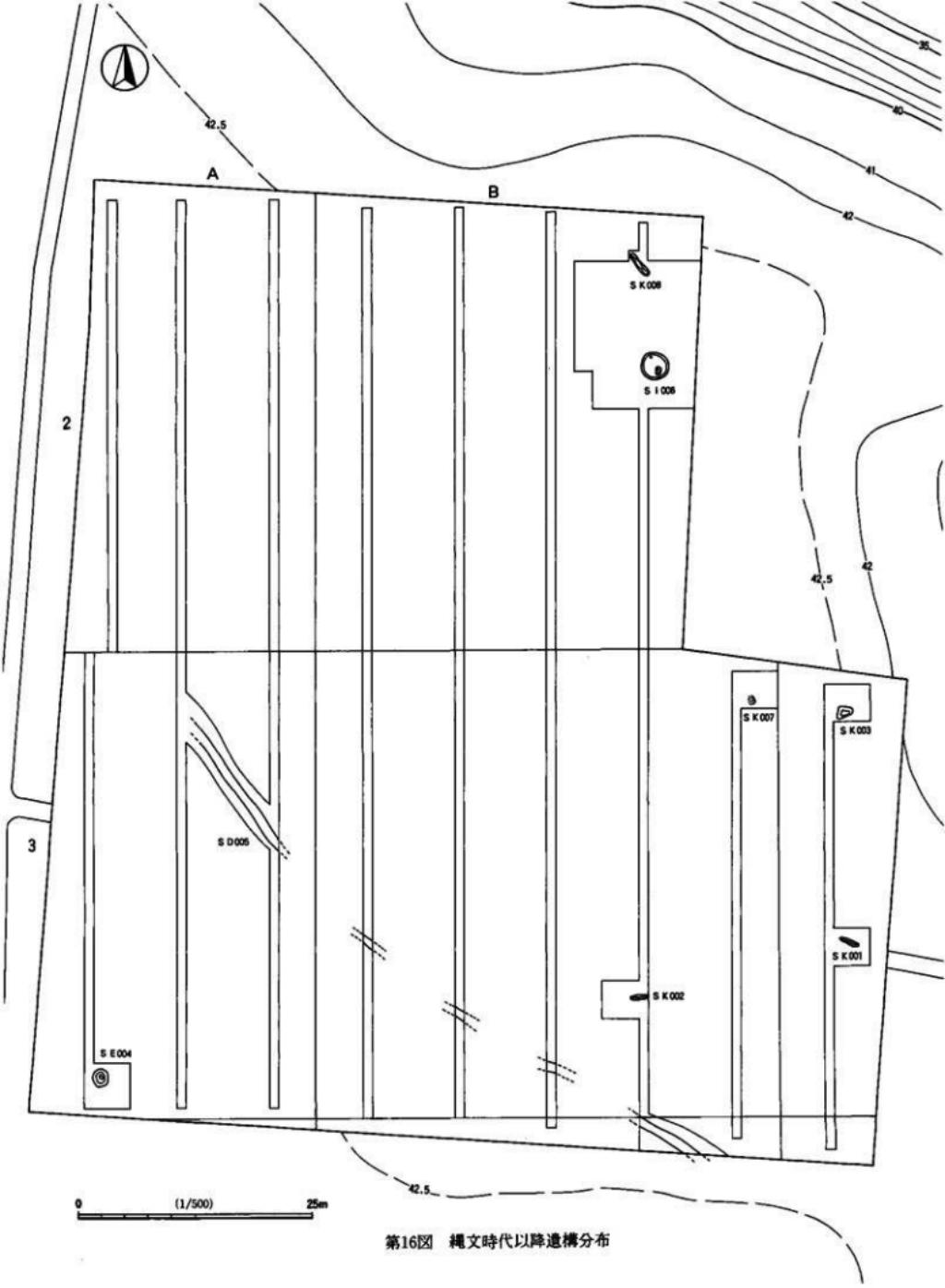
番号	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	押抜番号	打面形状	打面網目	頭部網目	背面構成					打角	末端形状	折面部位	母岩
											I	II	III	IV	C				
1	03C50002	剝片	32.9	31.8	25.2	18.0	3	C			2				O	89	-	ホルンフェルス1	
2	03C510002	剝片	45.6	49.0	14.6	35.9	4a	L		1	2			O	-	M	ホルンフェルス1		
3	03C510003	剝片	24.4	50.9	13.5	21.9	4b	-	-	1	1			O	F	M	ホルンフェルス1		
4	03C510004	剝片	38.9	36.8	10.5	16.0	4d	H		3			2	O	128	F	ホルンフェルス1		
5	03C510005	剝片	50.4	23.9	10.4	12.0	2	P		2				H	-	H	ホルンフェルス1		
6	03C510006	剝片	36.5	16.1	9.8	5.0	4c	H		1				O	102	P	ホルンフェルス1		
7	03C510007	形器	28.3	21.0	6.4	4.8	1										珪質頁岩2		
8	03C510008	器	46.1	30.5	20.2	36.5												珪質頁岩2	

第8表 第4ブロック組成表

	器種	剥片	器	計	数量比%
珪質頁岩2	1			1	12.50
砂岩2			1	1	12.50
ホルンフェルス1		6		6	75.00
計	1	6	1	8	100.00
組成比%	12.50	75.00	12.50	100.00	

第9表 ブロック外石器属性表

番号	遺物番号	器種	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	押抜番号	打面形状	打面網目	頭部網目	背面構成					打角	末端形状	折面部位	母岩
											I	II	III	IV	C				
	03B880002	鉈	片	11.4	8.8	2.0	0.3	L			3							珪質頁岩3	



第16図 繩文時代以降遺構分布

### III 繩文時代

#### 1 概要

本遺跡の縄文時代の遺構は、早期住居跡1軒、早期の陥穴3基、前期の土坑2基が検出された。それらの遺構は調査区の北東部から東側にかけて散漫に分布していた。縄文土器は量的に多くはないが、調査区の北東部でまとまって検出されている。それらの縄文土器は前期の浮島式土器、興津式土器を主体としている。ほかには、早期の撚糸文系土器が調査区の北東側にややまとまるにすぎない（第16図）。

#### 2 遺構と遺物

##### （1）竪穴住居跡

S I 0 0 6 (第17・18図、図版6・8)

調査区の北東隅、2B37・47区で検出された。北側の谷に面する台地縁辺の平坦面に位置する。

平面形状はほぼ整った円形を呈する。規模は長軸が2.3m、短軸が2.2mを測り、床面積はおよそ4.0m<sup>2</sup>を測る。主軸の方位は、N-28°-Wを示す。床面はソフトローム層を掘り込まれており、特に床面の硬化面は確認されなかった。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、床面は平坦な浅い皿状に窪む。確認面から中心部の比高差は0.1mほどであり、壁高は0.06mほどである。覆土はソフトローム土が少量混入する暗褐色土を主体としており、その下層は、壁側に沿ってソフトローム土が多量に混入する暗黄褐色土が堆積している。床面は比較的平坦であるが、土層断面で観察すると部分的にロームブロックの凹凸面が見られる。床面からは主柱穴と考えられるピットは検出されず、北側に1か所の径0.2m、深さ0.1m程に掘り込まれたピット（pit 1）が存在するのみである。南西寄り壁から約0.3m離れて、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.15mの梢円形の窪みが存在する。窪みは壁から中央部にかけて緩やかに傾斜する。この窪みの覆土は3層に区分され、上層がソフトローム土を多量混入する暗褐色土、中間の層が炭化物粒子を非常に多く混入する黒色土、下層がソフトローム土を多量に含む暗黄褐色土で構成されていた。この窪みは、焼土や、構底面の被熱は観察されないものの、炉に準じた機能を果たしていたと考える。

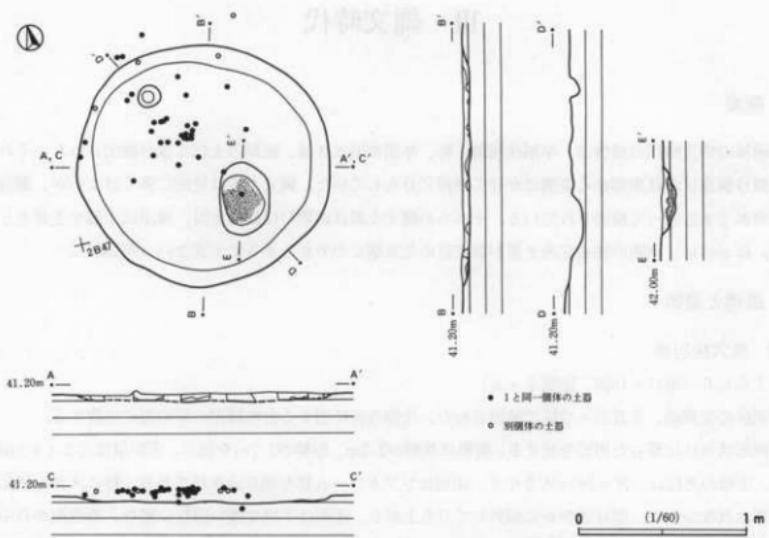
出土遺物は、土器片約40点が出土した。北寄りのpit 1と窪みの間を中心としてまとまって出土しており、大半が床面より0.1m程浮いた状態で出土した。大部分は同一個体の撚糸文土器片であり、別個体の撚糸文土器としては1点だけ微細な土器片が出土しているのみである。

1は推定口径31.8cmで、胴部から口縁部に向かってほぼ直立し、口唇部のところで急に外曲する。口唇部は肥厚している。口唇部文様は二段構成で、単節R Lの斜繩文である。口縁部文様は横走する単節R Lの繩文である。なお、口唇部と口縁部の境に連続する指頭圧痕が施されている。胴部文様は縦走する単節R Lの繩文である。

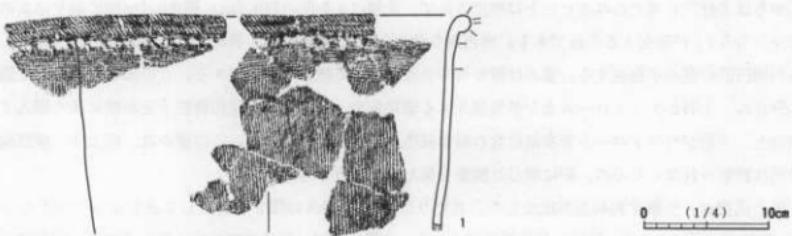
##### （2）陥穴

S K 0 0 1 (第19図、図版7)

調査区南東端、3C61区に位置する。平面形状は長梢円形で長軸端部がやや尖る形状を呈する。規模は長軸長2.3m、短軸長0.5m、深さ1.5mを測る。長軸方位はN-69°-Wである。壁は横断面では垂直に立ち



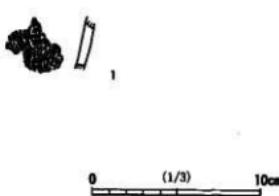
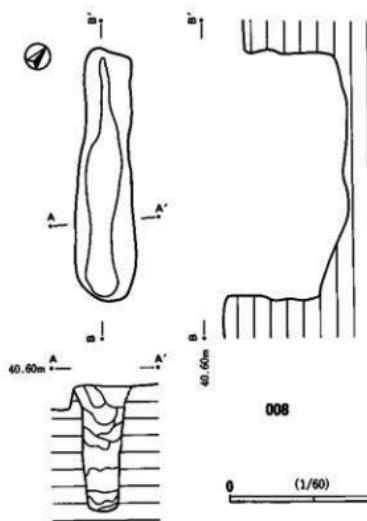
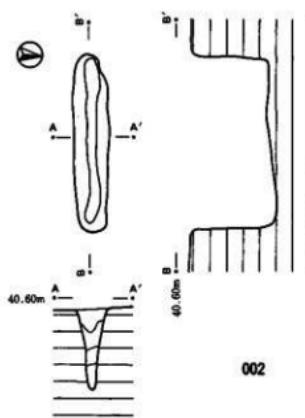
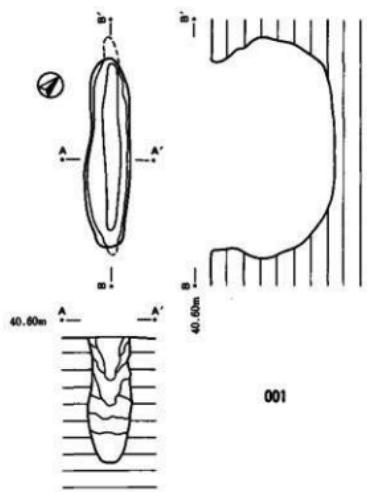
第17図 S I 006



第18図 S I 006出土土器

上がるが、長軸方向の両端部がオーバーハングし、壁は縦断面では袋状に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は上層が暗褐色土、中層から下層が暗黄褐色土を主体として堆積しており、自然堆積を示している。

遺物は出土していない。



第19図 SK001・002・008, SK008出土土器

### S K 0 0 2 (第19図、図版7)

調査区南東寄り、3 B 76・77区に位置する。平面形状は長楕円形で長軸端部は円味をもつ形状を呈する。規模は長軸長2.2m、短軸長0.4m、深さ1.0mを測る。長軸方位はN-87°-Eである。壁は横断面では急角度のV字状に立ち上がるが、壁は縦断面では垂直に立ち上がる。底面は東側はほぼ平坦であるが、中央部から西側端部にかけて傾斜してやや深くなる。覆土は暗褐色土を主体として堆積しており、自然堆積を示している。

遺物は出土していない。

### S K 0 0 8 (第19図、図版7・8)

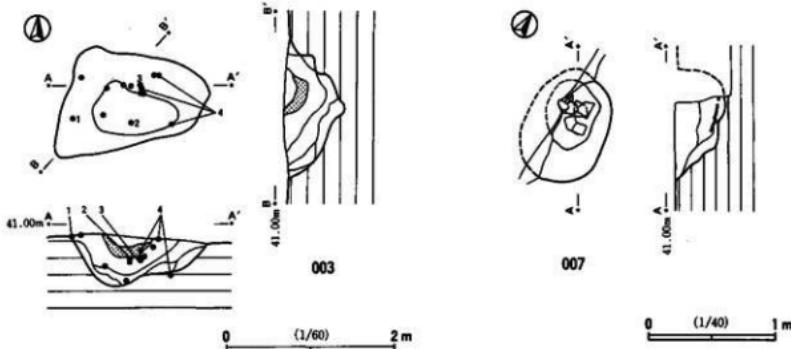
調査区北東端、2 B 16・17区に位置する。平面形状は長楕円形で、長軸端部は北端で長方形に近く、南端で円味をもち幅広となる形状を呈する。規模は長軸長3.0m、短軸長0.7m、深さ1.5mを測る。長軸方位はN-43°-Wである。壁は横断面ではほぼ垂直に立ち上がり上面でやや広がり、縦断面では垂直に立ち上がる。底面は、南端で浅く中央部に向かって深くなり北端で再び浅くなり、縦断面で凹凸がある。覆土は、上層で暗褐色土を主体とし、下層で暗黄褐色土を主体として堆積しており、自然堆積を示している。

遺物は縄文土器が微量出土している。1は縦走する縄文が施されている洞部片である。撫糸文土器である。

### (3) 土坑

#### S K 0 0 3 (第20・21図、図版7・8)

調査区東寄り、3 C 11区に位置する。平面形状は不整楕円形で、長軸端部は西側で尖るように膨らみ幅広となる形状を呈する。規模は長軸長2.0m、短軸長1.2m、深さ0.7mを測る。長軸方位はN-63°-Eである。壁は、段をもって立ち上がり、壁際で急角度に立ち上がる。底面は中央部で椀状に深くなり、その周囲はやや平坦な面である。覆土は、上下の層に挟まれて、第2層（スクリーントーンの層）が焼土を主体とする赤褐色土で、皿状に浮いた状態で堆積している。この焼土層は自然堆積ではなく、廃棄されたような状況を呈する。他の層は、上層から中層は暗褐色土から黒色土を主体とし、下層で暗黄褐色土を主体として堆積しており、自然堆積を示している。



第20図 S K 003・007

遺物は、縄文土器が中央部に焼土層の下層にややまとまって出土している。1はハマグリを施文具とした波状貝殻腹縁文が施されている。2は隆帶を指で摘んで施した凹凸文が二段ある。3~4は底部付近の土器片で、無文である。すべて興津式土器である。

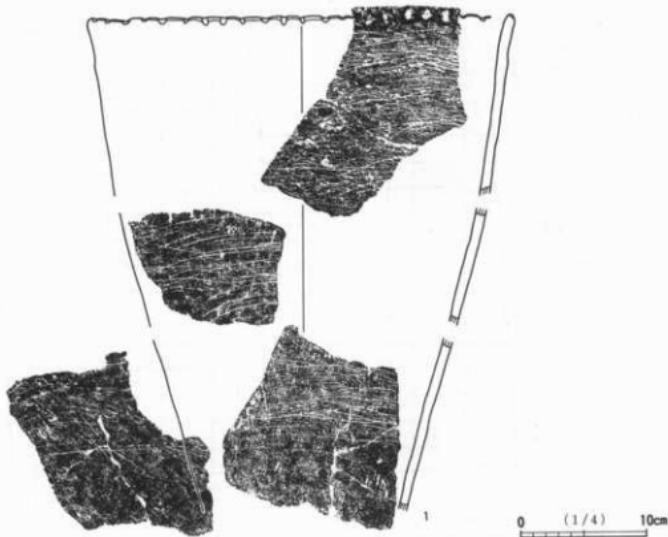
S K 0 0 7 (第20・22図、図版7・8)

調査区東寄り、S K003の西側に近接して3 C10区に位置する。平面形状は南側がやや膨らむ楕円形状を呈する。下層確認調査時の壁面で確認されたため、1/3ほど西側を削平する。規模は推定で長軸長0.9m、短軸長0.7m、深さ0.5mを測る。長軸方位はN-20°-Wである。壁は、北側で急角度に立ち上がり、南側でやや緩やかに立ち上がる。底面は、中央部がやや皿状に平坦になる。覆土は、上層から中層は暗褐色土を主体とし、下層で暗黄褐色土を主体として堆積しており、自然堆積を示している。

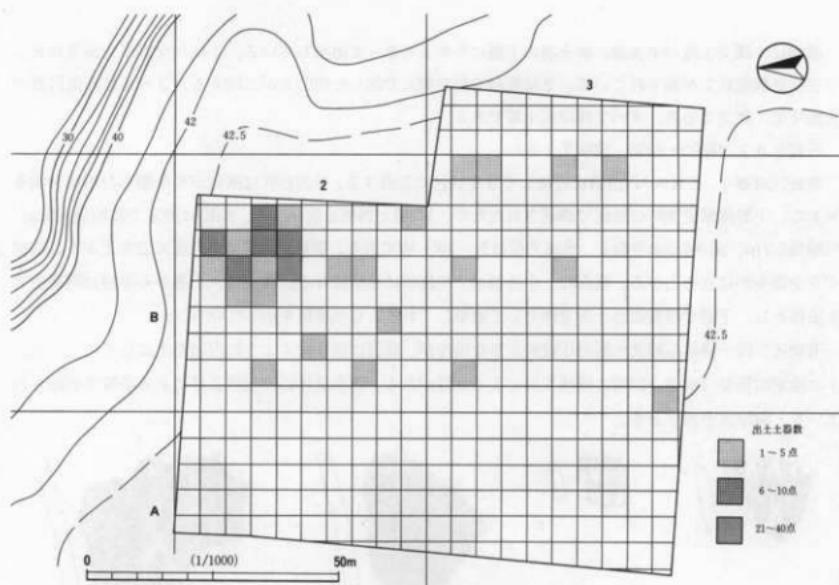
遺物は、同一個体の縄文土器の比較的大きな破片が、底面に張り付くように内面を上にして出土した。1は推定口径33.1cmで、口端に棒状工具による刻目がある。器面全体に櫛歯状工具による条痕文が施されている。興津式土器である。



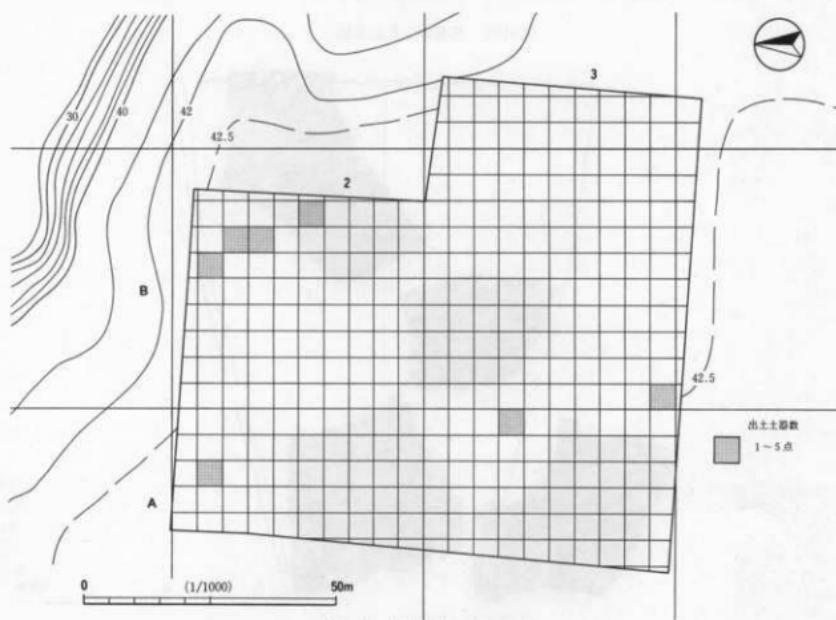
第21図 S K003出土土器



第22図 S K007出土土器



第23図 土器分布（第1群）



第24図 土器分布（第2群）

### 3 グリッド出土遺物

#### (1) 土器 (第23～28図、図版6・8)

本遺跡から出土した土器は総数633点であり、早期から中期初頭までの型式にわたっている。なかでも、前期後半の浮島・興津式土器が全体の78%を占め、一番多い。これらを大別すると、以下のとおりに分類される。さらに、細分については形態及び文様による分類にしたがって行う。

第1群土器 早期前半の撚糸文系土器

第2群土器 早期中葉の田戸下層式土器

第3群土器 前期前半の黒浜式土器

第4群土器 前期後半の浮島・興津式土器

第5群土器 前期末から中期初頭の土器

#### 第1群土器 早期前半の撚糸文系土器 (第23・25図1～5、図版8)

本群は、全体の18%を占め、調査区の北東側に多く分布する。特に調査区北東側の2Bグリッドを中心集中する(第23図)。文様は縄文と撚糸文に分類でき、その比率は89%・11%である。口縁部文様から細分すると、井草式土器・夏島式土器に分類できる。

##### 第1類 井草式土器

###### 第1種 口唇部が肥厚し、外曲するもの (1～2)

1は口唇部文様が三段構成による単節RLの斜縄文である。口縁部は無文帶が構成されている。2は口唇部文様が二段構成による単節LRの斜縄文である。口縁部は横走する単節LRの縄文が施されている。すべて井草I式土器である。

###### 第2種 口唇部が肥厚せず、外曲するもの (3～4)

3～4は小型の土器で、口唇部文様が二段構成の斜縄文である。頸部文様は横走する縄文が施されている。井草I式土器である。

##### 第2類 夏島式土器 (5)

5は口唇下8mmのところから、縱走する撚糸文が施されている。縄文原体の節がやや大きい。

#### 第2群土器 早期中葉の田戸下層式土器 (第24・25図6～10、図版8)

本群は、総数が9点と少なく、疎らに、散在する(第24図)。この時期は沈線文が主流となる。

##### 第1類 太沈線文が施されるもの (6～7)

6～7は文様が横位の平行沈線文である。

##### 第2類 細沈線文が施されるもの (8～10)

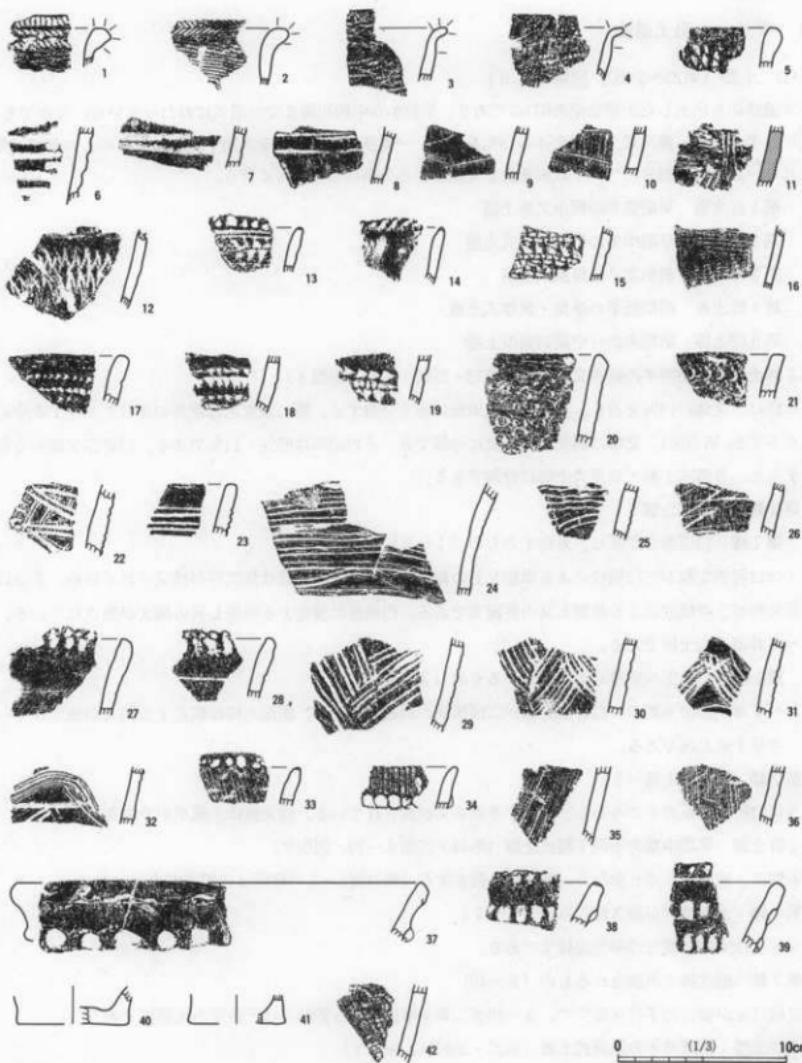
文様は8が横位の平行沈線文で、9～10が二条を単位とする菱形又は三角形の沈線文であろう。

#### 第3群土器 前期前半の黒浜式土器 (第25・26図11、図版8)

本群は、総数が13点と少なく、疎らに散在する(第26図)。なお、この時期の特徴は胎土中に纖維が含まれることである。11は地文に撚糸文が施されている。

#### 第4群 土器前期後半の浮島・興津式土器 (第25・27図12～41、図版8)

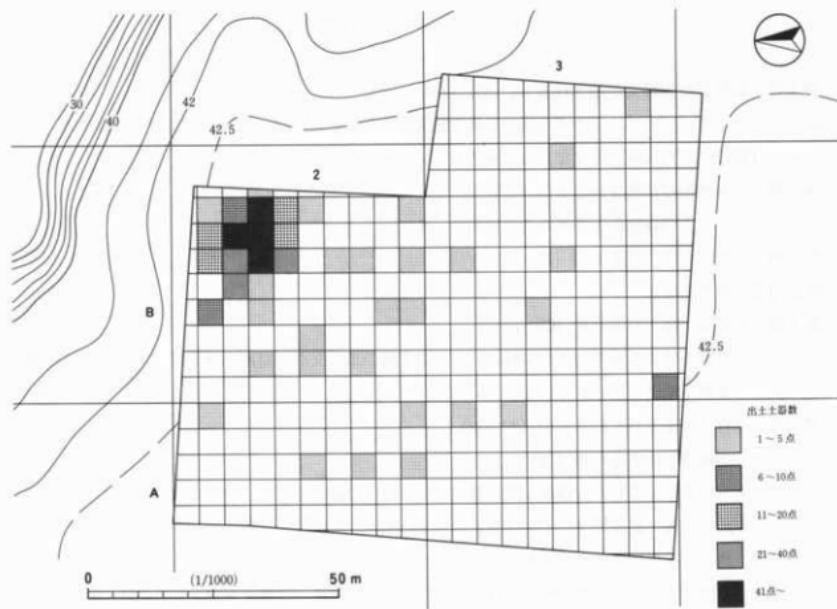
本群は調査区の全域に分布する。しかし、詳細にみると第1群土器と同様、調査区北東側の2Bグリッドに集中している(第27図)。竹管や貝殻の施文具が多く使用され、この時期から胎土中に纖維の混入がな



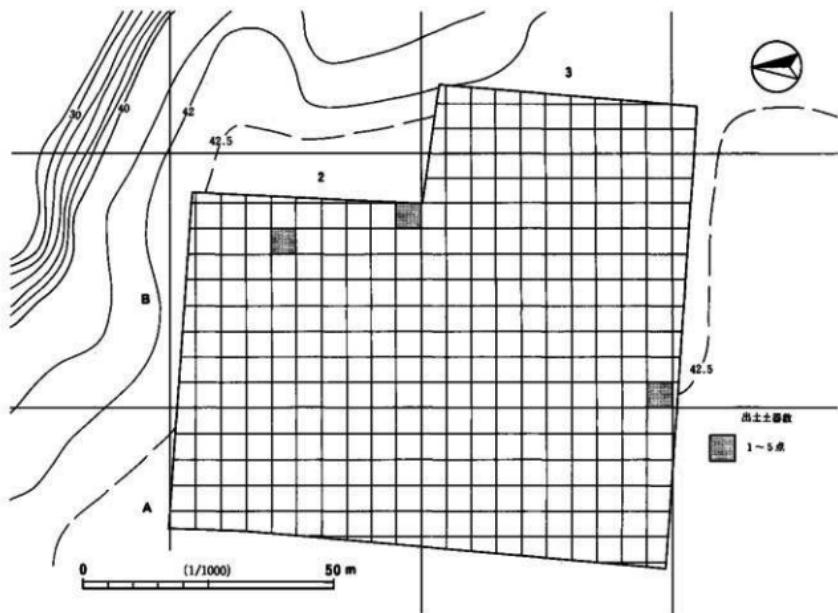
第25図 グリッド出土土器



第26図 土器分布（第3群）



第27図 土器分布（第4群）



第28図 土器分布（第5群）

くなる。

**第1類 波状貝殻腹縁文が施されるもの（12～16）**

12はハマグリを、13～16はアナダラ属の貝殻を施文具としている。13～14は口端に刻目を有する。なお、13と16には横位の平行沈線文も文様として施されている。

**第2類 变形爪形紋が施されるもの（17）**

17は口縁部片で、口縁部のところから外反している。

**第3類 三角文が施されるもの（18～19）**

浮島III式土器である。

**第4類 爪形文が施されるもの（20～21）**

20は口縁が外削ぎ状になっている。文様は「ハ」の字状の爪形文が不規則に施されている。21は口縁が平坦で、爪形文が不規則に施されている。

**第5類 沈線文が施されているもの（22～32）**

**第1種 半截竹管によるもの（22～26）**

22は撚糸文を地文としている。浮島I式土器である。23は口縁が平坦で、口唇下14mmのところから平行沈線文が施されている。25は施文法が押引きになっている。

**第2種 ヘラ状工具によるもの（27～28）**

27～28は同一個体である。口端に刻目を有し、口唇部に短沈線状の押捺文が施されている。口縁部あたりから外反する。浮島III式土器である。

### 第3種 榆歯状工具によるもの (29~32)

29~30は鋸歯状に、31~32は波状に施されている。すべて興津式土器である。

### 第6類 条線文が施されるもの (33~36)

33は口端に刻目を有する。34は口唇下18mmのところに粘土を逆立てる手法で凹凸文が施されている。すべて興津式土器である。

### 第7類 凹凸文が施されるもの (37~39)

この文様は粘土を逆立てる手法で行われている。37は推定口径24.4mmで外反し、輪積痕が見られる。

38~39は口端に刻み目を有する。すべて興津式土器である。

### 第8類 無文のもの (40~41)

すべて底部片である。40は推定底径6.6cmで、41は推定底径5.8cmである。

### 第5群土器 前期末から中期初頭の土器 (第25・28図42、図版8)

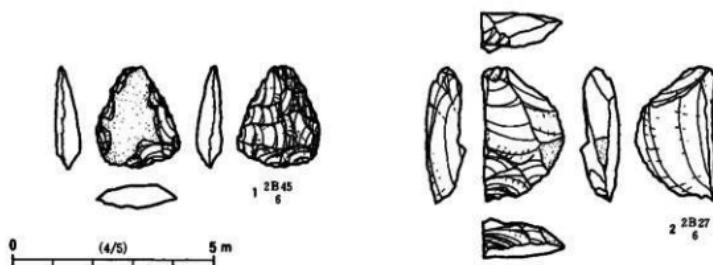
本群は総数が4点と一番少ない。分布状況は疎らである(第28図)。42は横走する結節縄文が施されている。

#### (2) 石器 (第29図、表10、図版8)

本遺跡より出土した石器はごくわずかである。石器総点数は石鏃1点、楔形石器1点、砥石1点、剝片2点、礫19点である。分布状況の遍在も看取されないが、石鏃及び楔形石器は前期の土器集中部分から検出されている。

1は石鏃である。表面は周縁の調整加工で広く自然面を残置している。裏面の調整加工は全面に及んでいる。側縁及び基部は円味をもって膨らみ、基部は凸基に整形されている。

2は楔形石器である。線状打面を構成している楔形石器であり、上下端部は潰れと階段状剥離が看取される。



第29図 繩文時代石器

第10表 繩文時代石器属性表

博物 館番 号	遺物番号	器種	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	打 出 剝離角	調整角	使用痕 の有無	被熱痕 の有無	折れ痕 の有無
1	02B450011	石 鏃	ガラス質安山岩	24.3	29.2	6.3	3.0					
2	02B270006	楔形石器	ガラス質安山岩	32.7	19.2	9.2	6.4					

## IV 中世以降

### 1 概要

本遺跡の中世以降の遺構は、井戸跡1基、溝1条のみである。これらの遺構は、搬出する土器等がなく明確な時期を確定できないが、遺構の形態などから中世以降の所産を考えられるものである。それぞれ調査区の南側と南西隅で検出されている。溝は確認調査で終了し、範囲の確認と一部の精査しか行っていないため、全測図に掲載するに留めた（第16図）。

### 2 遺構

#### (1) 溝

S D 0 0 5 (第16図)

調査区南側、3B区南東側から3A区北側にかけて位置する。北方向に緩やかにカーブを取りながら、長さ36m、幅1mのほぼ北西から南東方向に緩やかに傾斜して延びる溝である。底面の幅は狭く幅0.2mほどであり硬化面は確認されていない。横断面形は緩やかなV字状を呈し、現存の深さは約20cm～40cmである。北東隅で、確認面よりも底面が高くなり確認できなくなっているが、さらに北西方向に延びていくと考えられる。覆土は暗褐色土を主体としているが、中間の黒色土層で宝永の火山灰と考えられる青灰色の砂質テフラが確認されている。

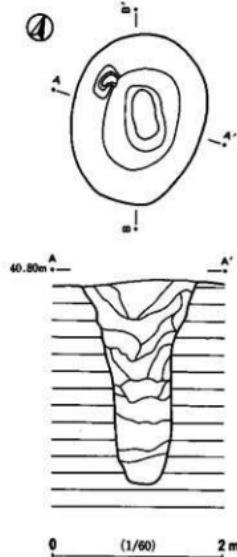
遺物は検出されていないが、宝永の火山灰の存在から近世の所産と考えられる。

#### (2) 井戸跡

S E 0 0 4 (第30図、図版7)

調査区の南西隅、3A85・95区に位置する。開口部では橢円形状を呈する。規模は長軸長2.0m、短軸長1.6m、深さ2.4mを測る。底面も橢円形状を呈しほぼ平坦である。規模は長軸長0.6m、短軸長0.3mを測る。長軸方位はN-20°-Wである。底面から中位までは垂直に立ち上がり、そこから上位に緩やかに朝顔状に開く。北西側中位の壁にはLの字状のピットが垂直に掘り込まれていた。井戸に伴う何らかの構築物を刺した柱痕と考えられるが、詳細は不明である。規模は長軸長0.3m、短軸長0.2m、深さ0.4mを測る。覆土は上層が暗褐色土、中層が暗黄褐色土を主体として堆積しており、最下層は粘性の強い黒色土で構成されており、自然堆積を示している。

遺物は出土していないが、構築形態から考えて近世のものと思われる。



第30図 S E 004

## V まとめ

旧石器時代 本遺跡では4か所のブロックから石器群が検出された。これらの石器群は、本文中で第I a文化層、第I b文化層の2亜文化層を設定して報告した。これらの石器群はいずれもIII層中から検出された石器群であるが、本遺跡のIII層の依存状態が良くなく、多分に後世の擾乱を受けている可能性が高い資料であった。資料数的に少量であり、石器群の比較検討を行うには未確定な要素が多い資料である。こうした前提条件を初めに断った上で、各文化層について若干述べてみることとする。

第I a文化層は、第1ブロック～第3ブロックが該当する。各ブロックは散漫な分布域を示しており、明確な集中域による分離ではなく、出土石器についても本文中でもまとめてあつかったため、3つのブロックをまとめて考えることとする。出土層位はIII層中部～上部と推定される。器種組成は、台形石器、石刃が少数存在するのみで、剥片類が主体の石器群である。石材組成としては、流紋岩が多いが、チャート、瑪瑙、黒曜石などの多様な石材が伴っている。流紋岩1の母岩からは小形の石刃、石刃状の剥片が生産されていることが注目される。剥片剝離技術は石刃技法が存在している。石核は検出されていないが、小形化した石刃が組成している。また、これらの石刃は切断されたように折れているものがほとんどである。明確ではないが石刃技法の最終工程で切断手法が介入する可能性がある。さらに、台形石器は切断手法による素材ではないが、石刃を生産する母岩と同一母岩の流紋岩1の剥片を素材としている。この台形石器は、形態的にはいわゆる「幾何形」を呈している。下総台地では、こうした石器群の類例があまり多くないが、小形の石刃技法の存在と、石刃の切断手法が見られることから、第I a文化層はナイフ形石器の終末期の時期を考えておくこととする。なお、第1ブロックで検出された細石刃石核は、単独の資料であり、上記の石器群とは技術的に異質な存在であるので、混在したものと考えておく。この細石刃石核は、いわゆる野岳・休場型の細石刃石核である。石材が珪質化した凝灰岩と思われる母岩であり（本文中ではチャートとした）、この種の細石刃石核で一般的に利用される信州系黒曜石ではないことを指摘しておくに留めるが、当該地域の石材獲得を考える上で注目される資料である。

第I b文化層は、第4ブロックが該当する。ごく少數の資料で構成されるブロックである。出土層位はIII層上面である。このブロックはホルンフェルスの同一母岩の剥片類と荒屋型彫器の単独資料により認定したブロックである。荒屋型彫器を含む石器群が東北地方の良質の珪質頁岩を専らに利用することを考えるとき、この剥片類と荒屋型彫器が共存するものなのか判断に苦慮するところである。ここでは、出土層位や分布状況から分離することができないため、一応共存していたものと考えておく。荒屋型彫器を伴ういわゆる削片系細石刃石器群は、最近の永塚氏の集成に依れば、千葉県内で12遺跡で検出されているという<sup>1)</sup>。本遺跡の資料で13例目の資料の追加がなされたことになる。荒屋型彫器が検出された遺跡としては、一部、荒屋型彫器として認定するのに判然としない資料があるが、本遺跡で8例目となる。本遺跡の荒屋型彫器は、木戸場遺跡や大網山田台遺跡群No.8地点の資料に比較すると、概して小型であり、また、彫刀面は、数回の刃部再生が看取され、器体軸に対して水平方向の彫刀面の角度を呈していることが特徴的である。やや形態的に差異が認められる。このことは、単独資料として当ブロックに存在するという、器種の搬入形態の相違が関係してくることが予想される。ホルンフェルスの大形削片の接合資料例は、大形偏平疊から横長削片を剥片剝離する資料である。この種の剝離技術が観察される資料が、細石刃石器群ある

いは同時期の石器群に共存するかという点については、大林遺跡第1ブロックに類似した資料が存在する。この資料は野岳・休場型細石刃石核の石器群と共存している<sup>5</sup>。細石刃石器群の時期の様相については、複雑な問題が多いのでこれ以上は触れないが、細石刃石器群と同時期にこのような剥片剝離技術が存在することは注目されて良い資料である。第1b文化層は比較資料的に十分でない部分が多いが、荒屋型彫器の存在から細石刃石器群の時期を考えておく。

縄文時代 調査区北東隅で早期の住居跡1軒が検出された。住居跡の掘込みが浅く依存状態は良くないが、ほぼ円形の深い皿状を呈する住居跡であった。住居跡の底面がソフトロームにとどまっているためか、柱穴痕は確認できなかった。この住居跡で注目される点は、中央部から南側に寄ってくぼみが検出されている点である。このくぼみの覆土は炭化物を多量に含んでいた。こうしたくぼみの存在は、撫糸文期の住居跡に共通した特徴であるといふ。本住居のくぼみはピットを伴って検出されなかつたが、炭化物を多量に覆土中に含むという点での共通項は重要である。北総台地で撫糸文系土器群の濃密に分布する空港予定地内の遺跡群では、香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）で1軒<sup>6</sup>、取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）では6軒の撫糸文期の住居跡が検出されて、その内の5軒の住居跡で共通したくぼみが確認されている<sup>7</sup>。撫糸文期の住居跡について、こうした炭化物を多量に含む掘込みを、今村氏は「灰床炉」として焼土を残さない形での炉との可能性を考え、炉と同等の機能を積極的に評価している<sup>8</sup>。本住居跡のくぼみは浅く、灰床炉としての構築方法を推定させる事例として一概に扱うことはできないが、焼土を残さない形での炉、あるいは炉に準じた施設と考えられる。このような考え方から本遺跡の住居跡の例は、広義の意味での炉の伴った住居跡であると積極的に考えておく。本住居跡の時期は、出土土器からみて井草I式期の時期が考えられる。撫糸文系土器群でも最も古い時期であり、竪穴住居跡の出現期の住居跡として貴重な資料が追加されたと評価できる。

縄文土器は、早期から中期初頭までの型式にわたって出土した。中でも、前期後半の浮島・興津式土器群が全体の78%を占め、一番多かった。ここでは本遺跡における浮島・興津式土器群の様相について記載する。

分布状況は、調査区北東側の2B区に集中していた。これを地形図に投影してみると、北東側の台地縁辺部に分布していることがわかる。谷津を隔てた対岸の台地に所在する一銀田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡）から出土した本土器群の分布状況を調べてみると、南西側の台地縁辺部に小範囲に分布し、密集している<sup>9</sup>。このことから、本遺跡を含む周辺の遺跡における本土器群は、台地の平坦部というよりも谷津に面した台地縁辺部に小範囲に分布しているようである。土器数量が少ないので、本土器群の型式論にまで及べないが、文様から浮島式期後半から興津式期前半の土器を多く出土していることが理解された。

#### 注

- 1 島立 桂・永塚俊司 1997 「千葉県における北方系細石刃石器群」「第4回 石器文化研究交流会－発表要旨－」石器文化研究会
- 2 田村 隆 1999 「大林遺跡」「佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1」（財）千葉県文化財センター
- 3 西川博孝ほか 1984 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV-No.7遺跡」（財）千葉県文化財センター
- 4 小久賀隆史・新田浩三 1994 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII 取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）」（財）千葉県文化財センター
- 5 今村香爾 1983 「縄文早期の竪穴住居址に見られる方形の掘り込みについて」「古代80」早稲田大学考古学会
- 6 小久賀隆史・新田浩三 1995 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX 一銀田甚兵衛山北遺跡（空港No.11遺跡）」（財）千葉県文化財センター

# 写 真 図 版



図版2



第1～3 ブロック全景  
西から



第1～3 ブロック全景  
南から



第1 ブロック  
南西から



第3 ブロック  
南から

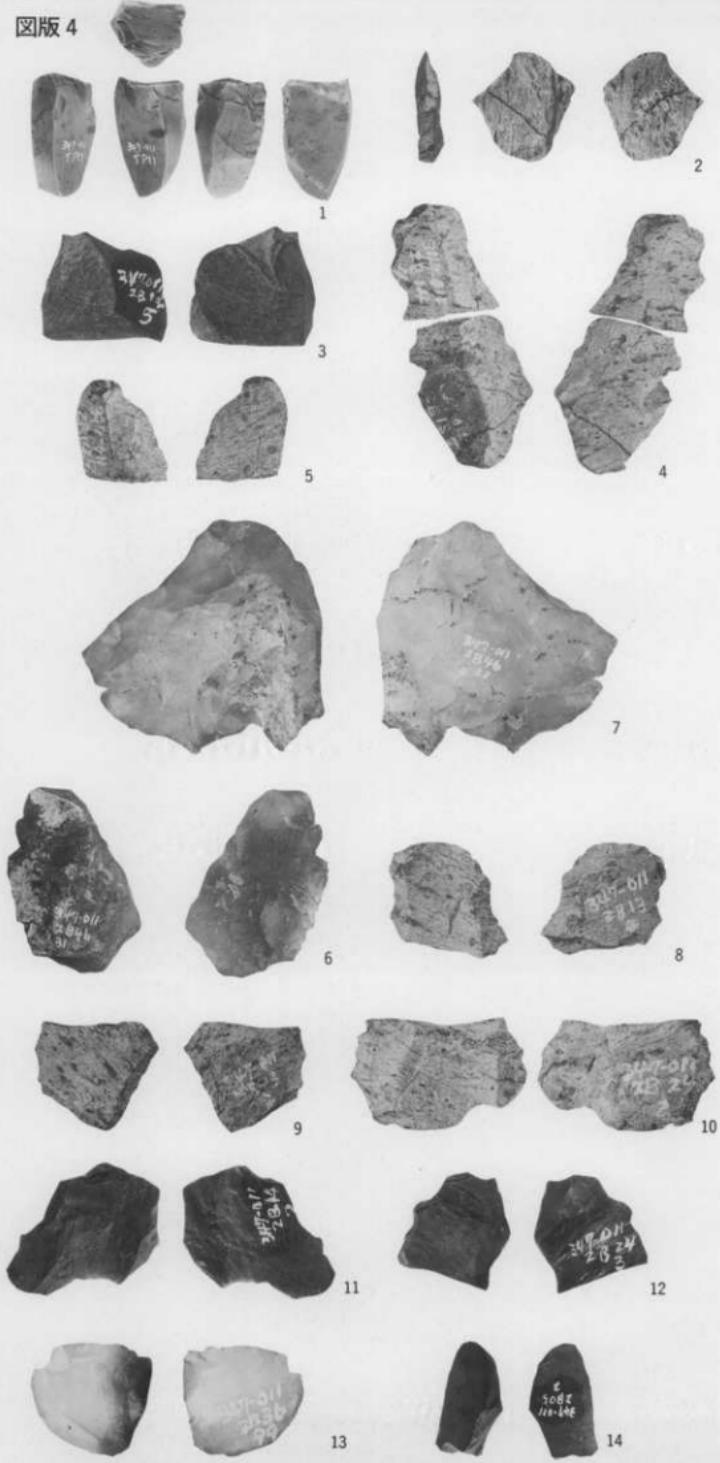


第3 ブロック  
南西から

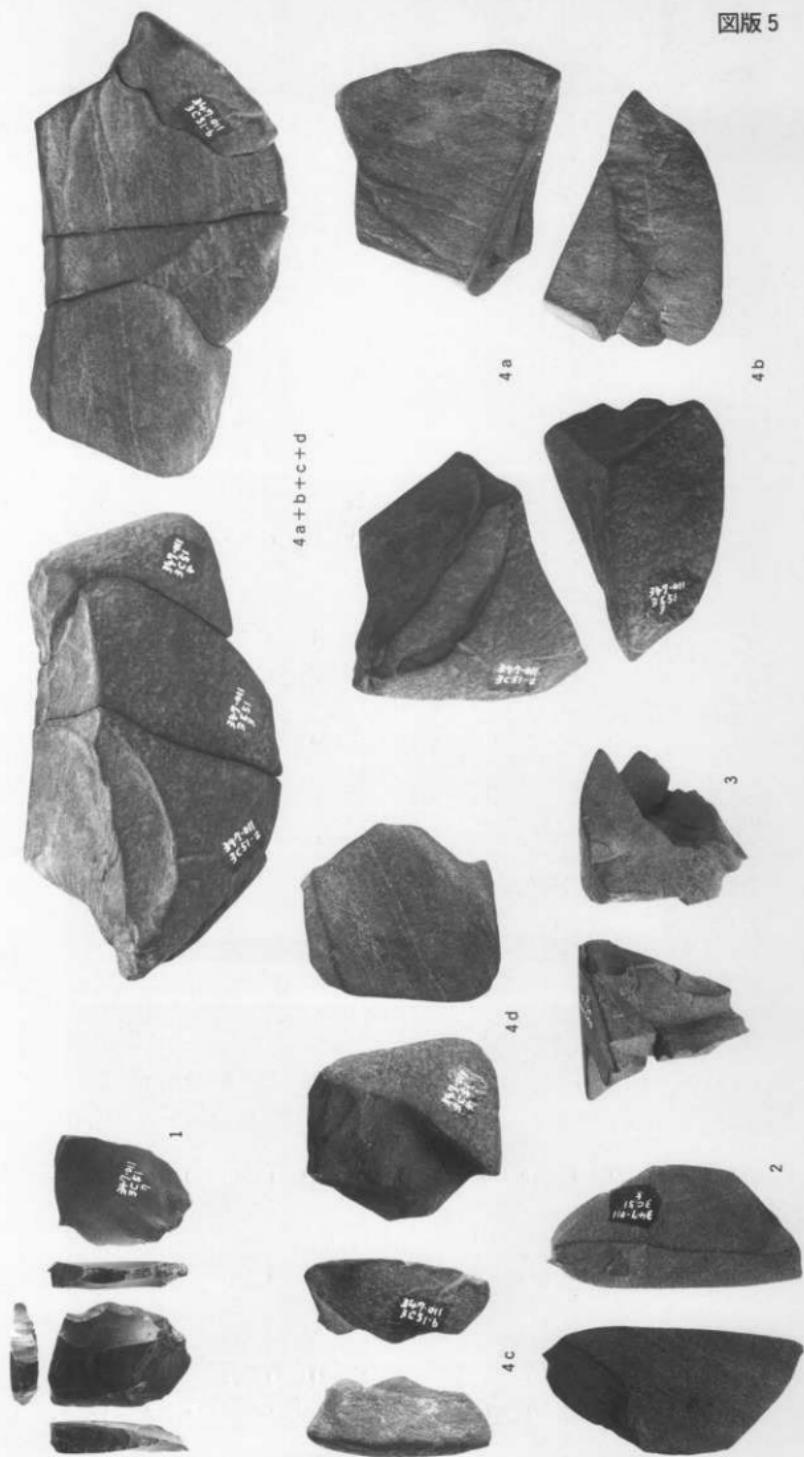


第4 ブロック  
南から

図版4



第1・2・3ブロック  
出土石器



第4ブロック  
出土石器



S I 006遺物  
出土状況 南から

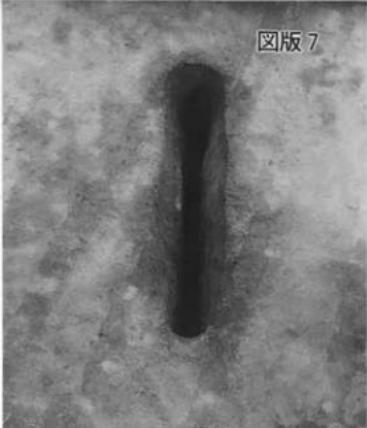


S I 006  
南から

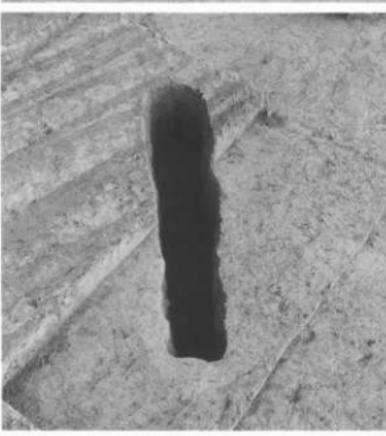


縄文時代前期  
土器集中地点  
南西から

S K001：左  
S K002：右



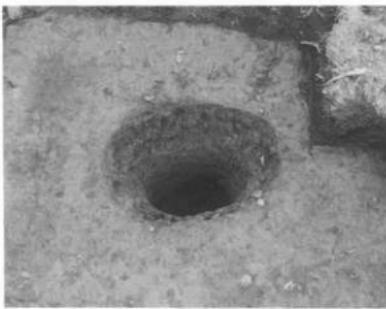
S K008：左  
S K003：右



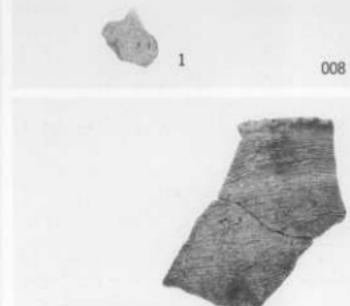
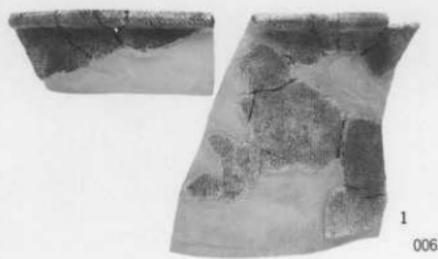
S K007遺物出土状況；左  
S K007；右



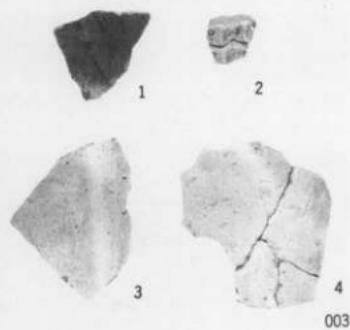
S E004



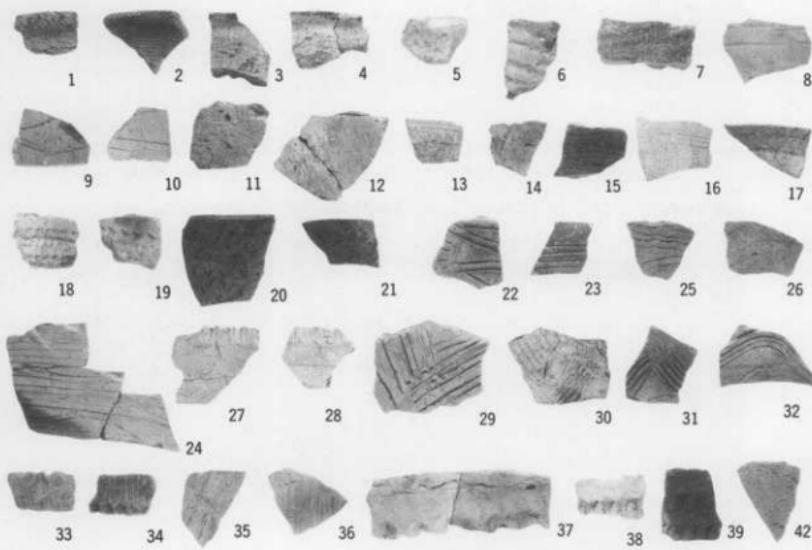
図版8



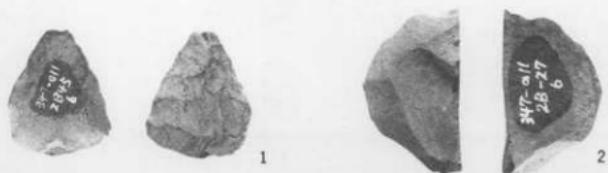
S K 008出土土器



S K 003出土土器；左  
S K 007出土土器；右



グリッド出土土器



縄文時代石器

報告書抄録

ふりがな	たこまち ひとくわだじんべえやまいせき						
書名	多古町 一鉢田甚兵衛山遺跡						
副書名	刈り草置場埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第305集						
編著者名	矢本節朗						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2				TEL 043-422-8811		
発行年月日	西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 °'\"/>	調査面積 m <sup>2</sup>	調査期間	調査原因
一鉢田甚兵衛山	香取郡多古町 一鉢田字甚兵 衛山454-1ほか	12347	011	35度 46分 47秒	140度 24分 22秒	19950801～ 19951026	7,875 刈り草置場 整備に伴う 埋蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
一鉢田甚兵衛山	集落	旧石器時代	石器集中地点	4地点	台形石器、石刃、細石 刃石核、荒屋型彌器	荒屋型彌器の出土	井草I式期の住 居跡の検出
		繩文時代 早期 前期	住居跡 陷穴 土坑	1軒 3基 2基	燃糸文系土器、浮島 式土器、奥津式土器、 石鏡、模形石器		
		近世	溝 井戸	1条 1基			

千葉県文化財センター調査報告第305集

**多古町一鉢田甚兵衛山遺跡**

刈り草置場埋蔵文化財調査報告書

---

平成9年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 新東京国際空港公園  
成田市新東京国際空港内  
(成田市木の根字神台24)

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 エリート印刷  
茨城県牛久市中央1-5-2

---